

日本写真家協会会報

NO.177
(2022. Mar.)

- 座談会「東京 2020 オリンピックの、長く熱き日々」
- 第 4 回「笹本恒子写真賞」受賞者決定
- 第 16 回「名取洋之助写真賞」受賞者決まる

JPS



Photo Kohira Naonori

SIGMA

もうひとつの最適解。

C Contemporary **28-70mm F2.8 DG DN**

希望小売価格(税込) 110,000円 花形フード(LH706-01)付

対応マウント:Lマウント用、ソニー Eマウント用

*Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。



シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com

写真家に知っておいていただきたい著作権のこと

YOU ARE A COPYRIGHT OWNER



一般社団法人 日本写真著作権協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

<https://jpca.gr.jp>

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

デジタルの時代だからこそ
改変してほしくない写真もあります。
これを「同一性保持権」と言います。
勝手にトリミングされたり
勝手に合成されたりしないように
この権利は守ってください。
作者の創作意欲を守るための権利、
著作者人格権のひとつです。
写真著作権を大切に。

■ Gallery	JPS ギャラリー 上山益男、井上嘉代子、西野嘉憲、水咲奈々 5 榎並悦子、宇宙 満	
■ First Message	二つの写真展に刺激されて 野町和嘉	11
■ Wonder Land	<座談会>取材担当デスクがいま振り返る 東京 2020 オリンピックの、長く熱き日々.....	12
■ Telescope	もう一つの東京 2020 スポーツ写真の現場から 20 株式会社アフロ 青木紘二氏に訊く	
■ Workshop	著作権研究(連載 52) 佐々木広人 22 令和の時代のスナップ撮影に必要なこと ~ 「オキテ」とアップデートのススメ~	
■ Zooming	写真の散歩道(連載 4) 鳥原 学 24 写真の街「銀座」界隈を歩く	
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(36) 写真保存センター委員会 26 一原爆被災を記録した写真原板の保存の意義を検証する一	
■ Award	2021 年第 16 回「名取洋之助写真賞」決まる 28	
■ Convention	第 47 回「日本写真家協会賞」贈呈式・第 16 回「名取洋之助写真賞」授賞式 ... 32 第 4 回「笹本恒子写真賞」授賞式・名誉会員顕彰式	
■ Exhibition	第 4 回「笹本恒子写真賞」受賞者・渋谷敦志 36 第 16 回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展	
■ Topics	賛助会員トピックス 38	
■ Digital Topics	数々の新規機能を盛り込んだ意欲機 Nikon Z 9 の進化 40	
■ Report	2021 年度「報道写真論」講座報告 42	
■ Books	JPS ブックレビュー 44	
■ Report	セミナー研究会レポート 47 2021 JPS フォトフォーラム オンライン「あなたが撮らずに誰が撮る」 YouTube 動画を公開、国際交流委員会ウェブサイト企画「表現者たち」Vol.7	
■ Information	追悼 = 名誉会員・藤本俊一、正会員・小林雅裕、枝川一巳、山口 直、..... 48 小原晴雄、小原 玲、堀切保郎、夏目安男、古川剛尚 ／経過報告／編集後記	
■ Comment	写真解説 50	
■ Education	「おやこ写真教室」開催 教育推進委員会 56	
■ Message	Message Board 58	
■ Gallery	X ギャラリー 浅岡 恵、ジェイソン ハレコ、中村 翔 60 表紙・小平尚典、表 4・吉住志穂	

広告 案内

- (株) シグマ
- (一社) 日本写真著作権協会(JPCA)
- OM SYSTEM GALLERY
- (株) 堀内カラー
- キヤノンマーケティングジャパン(株)
- (株) タムロン
- リコーイメージング(株)
- (株) ヨドバシカメラ
- 富士フイルム(株)



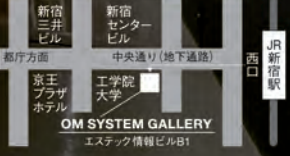
OM SYSTEM GALLERY



OM SYSTEM GALLERYのご案内

オリンパスギャラリー東京は2022年2月3日より
OM SYSTEM GALLERYへと名称変更いたしました。

*所在地・営業時間などの変更はございません。写真展のご応募お待ちしております。



新宿三井ビル
新宿センタービル
京王プラザホテル
工学院大学
OM SYSTEM GALLERY
エスプレードビルB1
西口
JR新宿駅



中山イチさん —— 上山益男

写真集『黄金の宝島 佐渡』



想愛 —— 井上嘉代子

写真展「美 sit 風景—想(おもう)—」



熊を撃つ猟師 —— 西野嘉憲

写真集・写真展「熊を撃つ」



金魚暖簾 —— 水咲奈々

写真集・写真展「みずあかり」



「APATANI STYLE」より ————— 榎並悦子

写真集『APATANI STYLE The Apatani Tribe of Arunachal Pradesh, India』
写真展「APATANI STYLE」



天地黎明／アシリパ —— 宇宙 満
写真集・写真展「カムイの島」

二つの写真展に刺激されて

会長 野町 和嘉

コロナ禍の暗雲未だ晴れぬなか、写真業界にとって最大のイベントである CP+2022 が、2020 年 2021 年に次いでイベントの中止、リモートのみの開催となるなど、写真界へのダメージはまだまだ続いている。パシフィコ横浜の広大なホールに充ちたあのエネルギーが再結集されるのはいつのことになるのだろう。半導体不足から各社の最新フラッグシップ機の生産が大幅な遅れを来しているとも伝え聞く。

一方でコロナ慣れした社会風潮もあってか、写真展についてはほぼ平常のペースで開かれるようになった。そのなかでもコロナ閉塞状況に風穴を開ける二つの写真展が面白かった。

一つはキヤノンギャラリー S で開かれた、西野壮平写真展「線をなぞる“tracing lines”」。巨大なキャンバスに、川や山岳のルートに沿って移動し撮影した様々な事象を、何千、何万コマというベタ焼きプリントにして、数ヶ月をかけて貼り込んでいった、とてつもない労力の集積によるコラージュ作品である。西野流コラージュのことは以前から知ってはいたが、例えば富士山を題材とした大作では、山頂まで 4 度の登山をして御来光や登山客の動静、各地で催されている祭りや行事といった森羅万象の断片を片っ端から貼り込み埋め尽くしたその作品には、言葉を超えた不思議な存在感があった。

いくつかの地方自治体から作品制作依頼が舞い込んでいて、すでに何か所かを完成させていることからして、しっかり評価を得ているのだろう。既存の観光ポスターなどでは出せないその地方ならではのディテールが丸ごと盛り込まれることから、関係者にとっても興味が尽きないのだろう。

デジタル技術の格段の進化により、写真を撮ることがあまりにイージーになりすぎてしまった現状に反旗を翻すかのように、西野さんは、ネガカラーフィルムで撮影したベタ焼きプリントを、ハサミを使って一枚ず

つ切っては貼り込んでいくという、念力を伴った手作業を繰り返すことで作品を構築している。

もう一つは、丸の内の富士フィルムイメージングプラザで開催された、千葉康由さんの写真展「アライバル」エチオピア・ティグレ内戦の現地報告。千葉さんは、スーダンの反政府抗議デモの写真で 2020 年の世界報道写真大賞を受賞している第一線のフォトジャーナリストで、ケニアのナイロビをベースに通信社 AFP の特派員として活動している。撮影は 2021 年 7 月であるが、コロナ禍のさなか、隣国から状況をウオッチしていたから迅速に動けたわけで、日本では動けなかっただろう。

私自身エチオピアには 1980 年代から関わり、凄惨な飢餓や、一方で聖書時代さながらの宗教行事をはじめとする独特の文化に魅了され撮り続けてきた思い入れの深い土地なのである。かつて内戦の泥沼で喘いでいた最貧国エチオピアが、民族和解によって経済成長の波を捉えて、この 30 年間で、アフリカの奇跡と讃えられるほどの繁栄に向かっていたのに、民族間の憎しみに火をつけ、凄まじい内戦に突入し瀬戸際に立たされているのだ。

千葉さんは、戦乱に巻き込まれた人々の悲劇を、富士フィルムの 1 億 2400 万画素の高精細カメラで撮影している。ドキュメンタリー写真をこれほどの高画素素材で撮ったケースは極めて珍しい。圧巻は、ティグレ解放戦線側に捕らえられた 7000 人にのぼる政府軍捕虜たちが、収容先の刑務所に向かって歩かされている姿を正面から捉えた一枚の巨大パネルである。戦争捕虜たち一人一人の絶望の表情が、残酷なまでに描写された迫真の一枚であった。

まったく対照的な二つの写真展であるが、コロナの災いを突き破る清々しい力に充ちていて、どんな時代であろうとも、写真家は写真表現で勝負する以外に逃げ道のないことを突きつけられた気分だった。

<座談会> 取材担当デスクがいま振り返る

東京 2020 オリンピックの、長く熱き日々



出席者：朝日新聞社・樫山晃生、読売新聞社・松本 剛、毎日新聞社・梅村直承、共同通信社・酒井直樹、伊吹和宏（東京 2020 組織委員会フォトチーフ）、時事通信社・山崎秀夫、東京写真記者協会事務局長・渡辺幹夫
司 会：伏見行介（理事、出版広報担当）

2021 年 11 月 16 日（火） 於：アクセア半蔵門貸会議室

■制約が大きかった取材時の移動

—— 今回の東京 2020 オリンピック競技大会（以下東京オリンピック）は、夏季のものとしては 1964 年以来の自国開催のオリンピックとなりました。自国開催ということでの取材の難しさ、厳しさのようなものを感じられたことはありましたか。

時事通信社・山崎 正直な印象としては、これまでの他国開催のオリンピックと変わりはありませんでしたね。今回のボクシングの会場は両国国技館だったのですが、普段の大相撲の開催と同じような気持ちで現場に行ったら、メディアエントランスは別の場所に決められていて、会場に入るために 30 分ほど歩かされるといったことはありました。ただ、そういったことはどこの会場でもあったようですし、他国のオリンピックでも似たようなことはあったかと思います。

—— 会場間の移動はしづらかったのですか。

山崎 これは運営の方には申し訳ないのですが、しづらかったですね。会場に初めて行かれた方は、皆同じような苦勞をされたのではないかと思います。



時事通信社・山崎秀夫氏

毎日新聞社・梅村 競技会場に向かうシャトルバスの運用が、日によって変わります。このバスが使い勝手が悪くて、こちらが使いたい時間帯の運転がない。これは前回の夏期北京オリンピックや、リオオリンピックの時よりも劣っていた点で、IOC から会場に入る許可を得たハイヤーでの移動というのがほとんどになりました。

山崎 海外から来た記者さんたちは、公共の交通があまりにも不便なので、タクシーチケットを使っていたところが多いようでした。

—— 五輪組織委員会として、お感じになっておられたことはありますか。

共同通信社・伊吹 使う側からすれば、使いにくいというのはあったと思います。それは治安維持の問題や、コロナ禍による 1 年間の開催の延期といった条件を考えるとやむを得ない部分もあり、けれども、もっと改善できる部分もあったように感じます。

—— 移動は当然、撮影機材を携えてということだったと思いますが。

梅村 私の場合で言えば、ボディはキャノンで、レンズは 600 ミリと、100 ～ 400 ミリのズーム、それにワイドレンズと一脚をキャリアバッグに入れて移動するというのが基本的な形になりました。バスケットボールの会場はさいたま市にあり、これは電車で移動しましたが、一度、人身事故で電車が止まったことがあり、この時はすぐに電車を降りて、タクシーを拾いま

した。

—— 私たち一般人は、オリンピックの開催中は、交通規制が多く苦労したのを覚えています、取材をされる側も、状況は同様だったのでしょうか。

山崎 大変でしたね。

読売新聞社・松本 私は、逆の印象も感じていました。今回の最大の課題はコロナ対策であって、私たちは当初から組織委が用意した循環バスは使わないと決めていました。そのためにハイヤーを数多く用意し、「VAPPs」(ヴァップス、各競技会場に車両でアクセス、駐車するための許可証)もできるだけ用意しました。それを効率良く運用しながら取材要員を移動させたので大きな問題ははありませんでした。その代わりに、どのカメラマンがどの会場を取材するのかという手配と共に、「VAPPs」を得ている車が、今どこにいて、どこに行くのに使えるのか、その手配もしなければならず、私の業務が大幅に増加しました(笑)。

梅村 今回は、ハイヤーがいちばん使いやすい乗り物となりました。会場によってハイヤーが入れる場所がまちまちだったのですが、これは外国の各社からの要請で、運用の方法に変更が加えられたのかもしれない。

朝日新聞社・榎山 大会の期間中、首都高速道が料金を値上げしましたよね。そのお陰で首都高はどこもガラガラで、移動は楽でした。大会期間中の私の車の累積走行距離は5000キロを超えました。

梅村 コロナ禍もあって、人流も減っていましたね。

■ 1年の延期期間中はコロナ対策に終始

—— 自国開催で楽だった点はおありでしたか。

梅村 各会場に日本人対応のフォトマネージャーさんがいらっしゃり、現場での打ち合わせができたということは助かりましたね。それから、取材予約をし忘れていた競技について、電話で問い合わせたら、すぐに許可を頂けたことがあり、このあたりは言葉が通じる同士ということで、交渉が楽でした。

—— フォトマネージャーというのは、取材カメラマンの管理をしているのですか。

伊吹 今回は43の全会場にフォトマネージャー、サ

ブフォトマネージャーを配置しました。日本人で、大きなスポーツ大会の運営への参加経験があり、英語に堪能で、写真の知識がある方は非常に少なく、人材発掘に苦労したのですが、そういう方にこの仕事を担当して頂きました。各会場のフォトポジションには限りがあり、コロナ対策としてソーシャルディスタンスを



毎日新聞社・梅村直承氏

確保する必要がありましたから、そのためのマネジメントをするのが役割です。ただでさえ大変なオリンピックの取材であるのに、今回はさらに煩雑な要素をつけ加えてしまったことは恐縮でしたが、幸いなことに定員オーバーで撮影ができないというようなことはなく、取材を進めて頂くことができました。取材に事前の許可申請を頂いたことも、コロナ対策の一環です。

松本 これまでは取材許可のカードさえ持っていれば、直接会場に行けて取材をできたものが、今回に関しては前日の午後4時までにはオンラインで申請をして、フォトマネージャーさんからOKという返事を頂いて初めて取材が可能になるというシステムです。ところが競技によっては、まだその時点で結果が出ていないものもありましたから、誰にどこの申請を出させるかという難しい決断を迫られましたね。

梅村 私は撮影をしながら、その手配をしていたので、結構、現場であたふたしていたのですが、競技が始まってから数日が経つと、どこの会場も取材のためのスペースには余裕があることが分りましたから、それからは必要と思われるものはすべてブッキングするという方法を採用することにしました。最初は会場に入れるかどうか、結構ドキドキしていたのですが、これは大丈夫でした。

伊吹 このコロナ禍が起きる前に想定していた数字よりは、海外からお見えになる方の数がかなり減りましたから、その意味では余裕がありましたね。これははっきりとした数字ではなく、ここでもいい加減なことも



言えないのですが、当初予定の7～8割くらいではなかったかなという感触があります。

—— 今回は開催が1年延期になりました。この1年という時間があつたおかげで、取材がうまくいったとか、そのような事例はおありですか。

松本 普通に考えれば、「1年準備期間があつたのだから、うまく行くだろう」ということになるのかもしれ

ませんが、実はこの1年間というのはコロナ対策に費やされていて、このような状況でどのような取材をするべきなのか、カメラマンが感染しないためにはどうしたら良いのか、そういう課題に取り組むのが精一杯で、オリンピックの取材に特化した準備には時間が充てられなかったというのが本当のところですね。

梅村 本当にオリンピックをやるのか、それともやらないのか。その見極めも必要でした。そのあたり、皆さんはモチベーションをどう保たれましたか。

榎山 5月、6月になつても、まだ、やる、やらないで揉めていましたよね。それが6月の終わりになつて、急に本当にやるのだと。それから慌てて準備したというところもありました。

東京写真記者協会・渡辺 聖火リレーが1年前の3月24日に中止になつて、そのままずっと止まったわけです。「聖火を走らせるの、走らせないの」という問題の答えが決まらないまま年が明けて、「走りましょう」と決まったのが2月です。緊急事態宣言が出ている中で、それでも3月にはやりましょうという動きになつた。それから、全国を走る聖火ランナーの写真を揃えるために、東京写真記者協会が中心になつて各地の写真記者協会の方に協力をお願いするのは大変でした。聖火がだんだん東京に近づいてきても、やるの？ やらないの？ は皆さん、半信半疑といったところで、開催が本当に決まったのは6月20日頃ではなかった



共同通信社、東京2020組織委員会フォトチーフ・伊吹和宏氏

かと思います。

伊吹 開催については、私も確信は持てませんでした。開催が1回延期になった後は、「止めることはいつでもできる」と考えて、開催に備えて黙々と準備をするというのが、それからの私の仕事でした。

—— そういった状況では、熱も入りづらいですね。

渡辺 そうは言つても、実際に聖火ランナーが走り、全ランナーの写真が紹介されるなどして、開催が近づいてゆくと、気持ちも盛り上がつていったのではないかと思います。

松本 私のところでも全ランナーの写真を掲載した紙面は好評を得ましたが、できたことはそれくらいで、オリンピック延期決定前に計画していた、様々な展開は実現することができませんでした。

渡辺 コロナだからできなかったことがある。その一方で、コロナだからやりようがあつたというのものもあつたのかもしれない。

—— オリンピックの時期は、まだワクチン接種も進んでいませんでした。その中で、取材をなさる方は、特別なコロナ対策というものをしていたのでしょうか。

松本 カメラマンはアスリートと近い位置にいますから、PCR検査を基本的に3日に1回。さらにもっとアスリートの近くに寄るカメラマンについては、毎日の唾液によるPCR検査が組織委員会から求められていました。その結果は各社の責任者に報告され、検査漏れが見つかるとその問い合わせも、やはり各社に連絡されます。そういった綿密な検査体制が敷かれていました。

渡辺 PCR検査の結果を管理するアプリが開発されて、入力漏れがあるとそれもすぐに報告されます。そういうメールが各社に夕方に届くことになります。

梅村 その結果は、当然、次の日の取材体制に関わってきますから、私たちはとても気を遣っていました。

■暑さの中で写真を撮るための工夫

—— 今回は真夏のオリンピック開催となりました。これほど暑かつたオリンピックというのは、過去にはなかつたのではないのでしょうか。



山崎 北京やアトランタは日本と同じくらい暑かったという記憶があります。

梅村 確かに北京は暑かったですね。ただ、今回も暑かったですから、特に陸上競技などの屋外競技を取材する人間には、取材にも休憩を入れるように気を配りました。いちばんきつかったのは、スケートボードだったみたいですね。日陰がないし、照り返しもきつい。頭に氷を乗せて撮影を続けていた外国のカメラマンもいました。

共同通信社・酒井 アーチェリーもきつかったみたいですね。暑さで倒れた選手もいました。サーフィンとゴルフも大変だったようですね。

梅村 サーフィンの取材に行ったカメラマンは、翌日のシフトを変えました。

松本 ビーチバレーの会場では、カメラマンの水分補給のために配られた水を、取材のための席を冷やすために使いました。そうしないと、席が熱くなっていて座れないのです。座席にかけた水が一瞬のうちに蒸発したそうです。

山崎 逆に屋内競技は、競技場の冷房が効き過ぎて寒かったですね。ハンドボール会場など、寒い寒いと。

梅村 私は競泳会場に行きました。社の仲間からは「おじさんだから仕方ないよね。涼しい所にいてね」と(笑)。メインプレスセンターも寒かったですね。あそこに行く時には上着が必須でした。

酒井 たまに外に出ていました。体が冷え切ってしまいますから。

—— 暑さのせいで機材に変化があったというようなことはありましたか。

山崎 わが社のカメラマンが使っているミラーレスカメラが、まるで動かなくなったということがありました。

松本 ボティが小さいので熱が籠ってしまうらしいですね。それですぐに高温注意という警告が出る。

梅村 ミラーレス機の場合、デバイスはずっと動き続けているわけですから、そうなりますよね。

—— 前回オリンピックの時は、報道の現場では、まだミラーレス機は主役にはなっていませんでした。今はミラーレス機の時代ですが、この方式のカメラを使

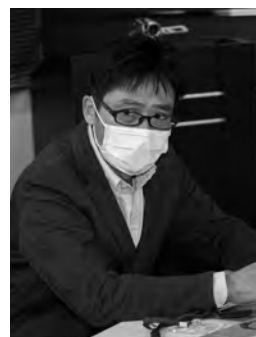
うことにアドバンテージはあるのでしょうか。

櫻山 ピント位置を気にすることなく撮影に専念できるというのは、大きなアドバンテージですね。一眼レフカメラでは測距点は中央にしかなかったわけですが、ミラーレスカメラでは測距点を隅々に置くこともできるので、撮影の幅が広がっています。もちろん、消音という部分も大きいと思います。

松本 ミラーレスカメラの登場と普及は、確かに一つの革命であったと思います。それでは従来のカメラがまったく使いものにならなくなったのかというと、そうではない。灼熱の中の大会で、ミラーレスカメラの耐久性に関して、私たちの知見がなかったということも明らかになった。一眼レフカメラを持つと同時に、カメラマンがミラーレスカメラも携えて、それではどのカメラが良いのだろうと、複数のメーカーのカメラを持つこともあった。今回の東京オリンピックは、そういった端境の中で行われたということもできると思います。恐らく、次の夏のオリンピックではミラーのあるカメラはなくなっています。その時にミラーレスカメラの時代が始まるのではないかと思います。

—— 北京冬季オリンピックも、当然ミラーレスカメラを用いての取材となるのでしょうか。

梅村 私自身、ずっと競泳を撮影していて、ミラーのあるカメラであればシャッターを切る間、被写体が見えなくなるものが、ミラーレスであればずっと追い続けることができる。その上で秒間何十コマも撮れるということで、これまでは撮れなかった写真が撮れるようになったわけです。そういう状況があるわけですから、次のオリンピックではすべてミラーレスカメラになるということは間違いのないところだと思います。ですから、今は端境期ではあるけれども、現場の人間は「もうこっちだよ」ということを感じていると思



共同通信社・酒井直樹氏



います。

山崎 ただ、北京の冬は寒いですから、カメラの耐久性を考えて、室内競技はミラーレスカメラ、屋外競技は一眼レフカメラという使い分けになるのかもしれませんが。

—— まだまだ検証も必要だろうと…。

山崎 摂氏マイナス20度の雪山で、ミラーレスカメラがどのような動きをするのかは、まだ誰も知らないわけです。

—— 先ほど、複数のミラーレスカメラを持たなければならないという話が出ましたが、新聞社が、会社によって特定のカメラメーカーのボディやレンズを使い続けているというようなことがあるのでしょうか。

松本 レンズの関係がありますから、ボディを一度に他社に乗り換えるということは難しいですね。また、会社で運用するには何セットもカメラとレンズが必要になる。現場はやはりいちばん良いカメラを使いたいし、並んで撮った隣の人間に「撮り負ける」わけにもいかない。そうすると、使いたいのは最新鋭の機種である。その意味で、今回は機材をどのように差配するかについても難しさのあるオリンピックとなりました。

酒井 ただ、北京オリンピックは、東京オリンピックから半年後の開催です。時間が長いという意味で、まだ、機材の様変わりには実現しないかもしれませんね。

渡辺 それからするならば、次の夏のオリンピックであるパリで、機材の様変わりが明確になるかもしれませんね。

—— 前回のリオオリンピックでは、会場にカメラを設置して、撮影操作は別の場所からデスクが行うようなカメラが登場し、そこにも報道の現場の様変わりがあったと教えて頂いたのですが、今回はそのようなカメラに進歩はあったのでしょうか。



朝日新聞社・榎山晃生氏

酒井 リモコンカメラには、競技場の天井にカメラを設置する、プールの水中に設置する、あるいは陸上競技場トラック脇の地面に設置するなどの方法があると思いますが、わが社では今回のオリンピックで、特命チームが長く綿密な準備をして、水中ロボットカメラとその『天井ロボット&リモートカメラ』を積極的に推進しました。その意味では特別なオリンピックとなりました。今回の東京オリンピックで、私たちは開催国の通信社ということになりましたから、全競技をカバーするためにすべての競技場に人を配しましたし、十分に人を割くことに留意しました。

—— もしもカメラマンの中に体調不良の人が出てしまったら、その時はどなたかが代役を務めることはできたのでしょうか。

渡辺 いえ。プレス用のカードは個人に対して発行され、会場への入場に際しても本人確認が必要とされたから、代役は効きません。ですから、先ほど梅村さんが仰っていたような、体調面に配慮したマネジメントが大切だったのです。

松本 取材スタッフ全員が、無事閉会式を迎えられるように導くことが、私自身の目標になっていました。

■通信環境にも様変わりが

—— 撮影が終わった後の機材の保守は、みなさん個人的になさっているのですか。

梅村 そうですね。特にバッテリーの充電は絶対に必要ですから、疲れて帰ってきてても、そういった保守作業や、送られてきているメールへの対応などが午前1時、2時まで続くことがありましたね。

松本 機材の保守も大変なのですが、最近のカメラは1枚の写真のデータ量が大きくなっていますから、その点でも扱いが大変になっています。

—— みなさん、撮っている形式はJPEGですか。

一同 そうですね。

—— JPEGのいちばん大きな画像で？

酒井 各社によって違うのではないかと思います。

梅村 わが社では、なるべく大きな容量で撮って欲しいと言っています。

山崎 わが社ではキヤノンのL8です。



フィナーレをメダリストの笑顔が飾った



現場の声を反映し大胆な構図の写真も掲載された

松本 わが社では圧縮はいっさいかけませんから、1枚あたりの容量が最大で50MBですね。それを保存するのは大変です。

渡辺 大会の期間中に読売新聞1社が撮影したカットが240万枚であると、この前担当の方から聞きました。この数は他社さんでもだいたい同じようなものではないかと思いますが、1枚の容量が大きくなりしかも撮影される枚数も膨大なものになっていますから、この保存も難しい問題になっているのだらうと思います。

松本 確かに撮影した枚数はそのようになっていましたね。そのうち、送信したものが43万枚です。これはリオオリンピックの時に撮られた枚数の11倍にあたります。

—— 一眼レフカメラであっても、シャッター回数を稼ぐことは可能です。それが今回のオリンピックで、それだけ急に撮影枚数が増えた理由は何なのか。

松本 やはり、自国開催で、多くの人間が撮影をしたということがいちばんの理由です。それから今回は通信回線の速度が向上しましたから、メインプレスセンターから本社に送る写真は無制限で送信できました。海外の大会では、送信するカット数を抑え、トリミングを済ませ、画質も落とし気味にして送信していたから、これは大きな違いです。

酒井 使用する回線は、各社によって違っていましたね。規格の高い回線は使用料もそれなりに高いものとなっていたので、どれを使用するかは各社の判断によります。わが社は、万が一にもデータの送付が遅れることがあってはならないと考え、最上位となる通信環境を選びました。

伊吹 今回は夏のオリンピックとしては初めての試みとして、IOCが指定した撮影ポジション、彼らの言



読売新聞社・松本 剛氏

葉で言うと「プライム・フォト・ポジション (Prime photo position)」ということになるのですが、そこに「回線と電源を敷設するように」という指示がありました。それまでは、各社が飛んでいるWi-Fiを捕まえないということだったのですが、今回は組織側がそれを準備し、それぞれの場所にLANケーブル用のソケットが準備されており、後はケーブルを持っていき、最初にパスワードを入力すればそこからネットワークの使用が可能になります。一方でV-LANを使用される会社もあり、これは料金に応じて、確実なデータ送付のための帯域が担保されるという仕組みです。

梅村 今回は通信環境については、今までの大会の中で最高でしたね。撮影した画像を無事送れるかどうか、これは結構現場の人間はドキドキしているものなのですが、今回はすべての画像を無事に送ることができ、締め切りに間に合わないということがいっさいありませんでした。

伊吹 それはほとんどの競技会場が無観客で開催されたということも大きく関わっているのではないのでしょうか。

梅村 無観客だったからだと思います。Wi-Fiにしても、結局は誰も使わないので空いていたと聞きました。

伊吹 それでも開会式の時にはWi-Fiが一度パンクしたようですね。そのような人が集まる場所では有線での接続を推奨していたのですが、やっぱり皆まずはWi-Fiを使うのですね。

酒井 私たちは、人が多く集まる所に行くと、果たして画像が送れるか、結構気を揉むものです。

樫山 開会式ではUSBケーブルとアダプターを配って回っている人がいました。

—— ところで、今回の東京オリンピックでは、スケートボード、サーフィンなど、幾つかの新競技が加わりましたが、この取材に関しては、事前にテスト、練習のようなものはなさったのでしょうか。

山崎 コロナ禍によって、各社ともほとんどできなかったというのが実情ですね。

梅村 2019年に全国大会が行われた競技の中には、オリンピック取材の予行演習になったものもありまし



速写性に優れたカメラが競技者の一瞬の表情を掴んだ



取材スタッフにとってもゴールとなった閉会式

た。1年の延期の間にスタッフが入れ替わざるを得ないようなこともあり、それも今回の取材の難しさになりましたね。

■日に日に溜ってゆくデータをどう扱うか

—— さきほども話が出ましたが、写真1枚あたりのデータ量が大きくなっていることは、管理をする側にとっては、切実な問題となっているのではないのでしょうか。

酒井 写真1枚あたりのデータ量は、日に日に大きくなっていると感じますね。カメラマンが一日の仕事を終わって、データを登録するのに1時間、2時間かかるのが当たり前になってきています。大きな大会の期間中は、ただでさえ睡眠時間が短くなるのに、このような作業のために起きていなければならないのかという状況は、本当に辛いものだったと思います。けれどもカメラマンというのは、少しでもきれいに撮りたいと考えますから、ここにジレンマがあります。会社から支給されるパソコンのメモリーは、たくさん撮るスポーツ取材ではすぐにいっぱいになってしまいます。聞いた話では、サッカーの試合1試合分の画像を入れると、パソコンがパンクするといいます。そうすると、今度は常に外付けのハードディスクを持ち歩く必要が生まれ、そこに溜ったデータを毎日掻き出す作業に追われることになる。これは大変なことです。

山崎 秒間30コマ撮れるカメラで10秒連写すれば、それで300コマですね。

酒井 それだけの連写を求められる競技は、そうは多くはないはずですが、例えば体操競技で選手の体が回転しているシーンを撮るとする。選手の目が写っているカットを撮るには、カメラを回し続けるしかないんです。

—— モノクロフィルム時代には、現場でカメラマンが現像して、そこからチョイスして送る。その間に最良のカットを選択する作業があったわけですが、今はそれがありませんよね。撮った写真がすべて送られてくる。

酒井 そうなりますね。同一に近い膨大な量の写真の中から最高の1枚を選び出すのは大変な作業です。

—— カメラマンが撮影した写真は、すべて会社のデ

ータベースに保存されるわけですか。

酒井 そうなります。もし、特定のコマを選んでそれを保存しようと考えたと、寝る時間がなくなります。会社の側としては保存するコマを選びたい。けれどもその作業を疲れているカメラマンに要求することはできません。

櫻山 そこは各社さん、悩みどころだと思います。た

だ、写真は歴史に残るものですから、なるべく大きなデータ量で保存したいと考えることも当然のことだろうと思います。写真の枚数も増えていますから、保管のためのコストも馬鹿になりません。そのバランスをどう考えるかは難しい問題です。

梅村 ただ、写真を見ていくと、仮に秒間30コマの撮影であっても、どこにその動きのピークがあるのかは想定ができるようになります。それは私たち専門職の技ということになるのでしょうかし、秒間に多くのコマの撮影ができるということは、撮影をする側にとっては嬉しいことなのです。選ぶことの手間よりも、撮れることの喜びの方が大きいです。だから私は、後輩のカメラマンに撮る枚数を減らせとは言いません。撮れるものはすべて撮った方がいいよ、と。その上で、良いコマを選ぶ力を身に付けて欲しい。このカットがなぜ良いのかを説明できる、プレゼンテーションの力を身に付けて欲しいです。報道写真は今までよりさらに、現場の感覚が大事になっていくと思います。

—— すると撮影担当者が変わると、その競技ならではの良いカットを選ぶ作業にも時間がかかるようになりますか。

梅村 幸いなことに、今回は担当者の交代があった競技でも、後任の者がベテランだったので支障はありませんでした。私たちのこれまでのやり方では、撮影が終わった後に皆で集まって、「このシーンが良かったね」などと仕事の成果や、反省すべき点を確認し合う場を設けているのですが、今回はコロナ対策というこ



東京写真記者協会
事務局長・渡辺幹夫氏



とで、そのような機会を持つことができませんでした。そこでどうしたかという、私がホテルのロビーで帰って来るカメラマンを待って一人ずつ話を聞き、「どうだった?」「ここが不満だった」「じゃ、気を付けるようにしよう」と、そういう形で意見を交換する場を設けました。

—— その仕事は、本来であれば、お酒を飲みながら、やった方が良いのかもしれませんがね（笑）。

梅村 そうなのかもしれませんが、そちらの方が楽しいはずなのですが、今回はそれができませんでしたから。

渡辺 自分の撮った写真がどういう扱いになるのか、紙面に載るまで分からない。

松本 それが本来的な姿なのかもしれませんが、コミュニケーションは必要でしょうね。

梅村 そこで今回は、少しやり方を変えました。デスクからカメラマンに「君たちが良いと思うカットを薦めてくれ。それを載せる。私の考えを押し付けることはしないから」と伝え、受けの姿勢を貫いたのです。そうなったことで、現場のモチベーションは上がりましたね。やはり、現場にいて「これが面白い」と感じたカットには、それなりの意味があるものです。今回は、その面白さが伝わったと思っています。

酒井 今回は、コロナ禍があって、カメラマンとエディターが顔を突き合わせて話し合う時間が持てませんでした。反省会ができないのです。一緒にお酒を飲むかどうかはともかく、作品について話し合う時間が必要はらずで、この状況には早く様変わりして欲しいものだと思いますね。

■写真の撮り方も刻々と変わってゆく

—— ではここで、今回各紙に掲載された写真を、皆で振り返ってみましょう。皆さん、さまざまな思いがあるのではないかと思います。

松本 私ども（読売新聞社）は聖火リレーのランナーの写真を、47都道府県すべて載せました。

—— 写真が掲載された人は、やはり嬉しいでしょうね。



東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会開会式、閉会式のチケット

酒井 私ども（共同通信社）は自前の紙面を持たないのですが、掲載された写真を見て、写真を大きく載せて貰うことは、やはり良いものだと再認識しました。最近、大きなニュースで採用されるラッピング紙面という2面にまたがる形で載せる手法では写真のメインに当たる部分が左側にある写真でないと具合が悪い。

これは新聞の形に折り曲げた時に1面が映えなくなるからで、新聞社の方にとっては常識であるらしいのですが、私たちはそのことに今回初めて気が付きました。

松本 私たちは開会式の入場行進で、写真の左側に主役を入れるという構図を、最初から意識して撮影しました。まず1面に主役が出て来て、新聞を開くと、写真も開いて、また違う楽しみ方ができるというわけです。

酒井 読売さんの写真を見た地方紙の方から、「大きく使うのにピントの深いコマが欲しかった」という要望が寄せられました。入場行進は斜めから撮れば、ピントが広い範囲に合う。でも、私たちは正面から行進を撮ったので、ピントの合う範囲が浅かった。私たちにはそのような構成・レイアウトまで計算した紙面作りのノウハウがなかったのです。

—— 新聞写真のレイアウトの方法は、刻々と変わるものなのですか。

松本 今はスマホもありますから、新聞の紙面では大きさを活かした写真が見られるように心がけています。

梅村 私ども（毎日新聞社）はサーフィンの選手の背中を大きく写し込んだ写真を掲載しました。これは海に挑む人間の姿を撮るという、カメラマンの気持ちをデスクが汲み取ったことで実現しました。陸上競技ではバトンタッチのシーンを、色々な場所にカメラマンを配置して追っています。この方法は、北京オリンピックから撮影を続けながら確立させたものです。

松本 私どもは、競技の結果だけでなく、写真の絵柄にこだわって撮影したカットも多くなりました。天井や、プールの水中に設置したリモートカメラによるものも多いです。文化部との共同企画で撮影したカットもありました。作家の方の観戦記に合わせた写真を掲載するというやり方です。

—— 機材の進歩によって、新しい撮影方法がどんどん開発されているのですね。本日はどうもありがとうございました。

（構成／出版広報委員・池口英司、
撮影／出版広報委員・川上卓也）



司会・伏見行介理事

もう一つの東京 2020 スポーツ写真の現場から

株式会社アフロ 青木紘二氏に訊く

東京オリンピックの写真を報道し続けたのは、新聞社、通信社だけではない。ストックフォトなどのエージェンシーにとっても、オリンピックは重要な報道の場となる。(株)アフロの代表でありながら、自らもスポーツ写真の第一人者として活躍を続けている青木紘二さんに「東京 2020」を通して感じたスポーツ写真への思いを伺った。

■制約が大きかった コロナ禍の中のオリンピック開催

—— 青木さんは、スポーツジャーナリズムの第一線で長く活躍してきた、私たちにとって大先輩なのですが、青木さんの「東京 2020」までの役割というものは、どのようになっていたのですか。

青木 2017 年からは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会フォトチーフという立場でした。それを 2020 年 3 月に辞めさせて頂きました。2021 年 3 月には、フォトアドバイザーも辞めさせて頂き、1 年延期されたオリンピックが開催された時は、アフロのカメラマンとして取材に当たっています。

—— フォトチーフというのは、文字通りトップのお立場ということですが、青木さんがおっしゃることであれば、皆が納得したのでしょうか。

青木 経験から考えるならば、私が引き受けるしかないのだらうなと考えて、お引き受けしました。私は海外で生活した時間も長かったものですから、外国人相手でも物おじせずに話をすることができた。その部分も大きかったのではないかなと思います。

—— 1964 年の東京オリンピックの時に、もう競技の写真を撮られていたとか。

青木 まだ、私が十代の頃です。朝、早起きをして国立競技場の入口の外で、アベベ選手が走って来るのを待ちました。アベベ選手が走って来るのが見えたら、感動してしまって涙がポロポロ出て来るんです。それが私が撮った、オリンピックの最初の写真です。

—— プロカメラマンとして撮影を始められたのは、いつのことでしょう。

青木 1976 年のインスブルック冬季大会からです。ただこの時は「良いものが撮れたら、使ってあげるよ」という風に言われて



東京 2020 の写真集は、これまでのものよりもう少しぐんぐんと厚いものとなった。

の取材で、まだプロ宣言をした直後の駆け出しの頃でしたから、取材用の撮影場所に入れてもらうこともできませんでした。けれども、せっかく来たのだから黙って帰りたい。自分でチケットを買って会場に入り、写真を撮りました。取材カメラマンとして会場に入れるようになるのはその後のことです。実はインスブルック大会の写真は、ほとんど使ってもらえなかったのですが、この時にプロとしてやって行くことを決めました。

—— アフロさんは、オリンピックの公式写真集を制作されていますが、これはいつから始まったのですか。

青木 1998 年の長野冬季オリンピックからです。この時は関係者に働きかけ「今までのような写真集では駄目で、もっと作品としての価値のある写真を使うべきである」という私の考えを一生懸命伝えました。それ以来、公式写真集の制作を続けています。目下の目標は、オリンピックの写真集を全国の中学校に配布したいのです。自分がオリンピックに興味を持ち、写真を撮り始めた頃、日本にはオリンピック関連の資料が何もなく。だから、自分がオリンピックに興味を持った頃と同じ年代の子どもたちが読むことができる資料となるものを作って、配りたいのです。

—— 取材でコロナ禍への対策はありましたか。

青木 入場制限であるとか、会場が無観客になったというような環境の変化への対応が必要でした。それでは客席が空いているのだから、場所を自由に選べるのかというと、そうはならない。臨機応変に考え、融通を利かすという考え方が、日本人は本当に下手だと思いますね。

—— 取材でコロナ禍への対策はありましたか。

青木 入場制限であるとか、会場が無観客になったというような環境の変化への対応が必要でした。それでは客席が空いているのだから、場所を自由に選べるのかというと、そうはならない。臨機応変に考え、融通を利かすという考え方が、日本人は本当に下手だと思いますね。

■アスリートとは動く芸術品だ

—— 今回は、競技の終了時間が夜遅くなった会場もありました。新聞社のカメラマンさんは、朝刊の締め切り時間もあるし、それからが大変だったというお話でした。



(株)アフロ代表・青木紘二氏

青木 それは私どもも一緒にですね。撮影した写真を、翌朝のテレビ番組で使えるように準備しなければいけませんでしたから。

—— 写真がデジタルになって、撮影法は変わりましたか。

青木 カメラに任せられることができる部分は多くなったと思います。その中で、私たちは写真の質をさらに上げてゆき、写真を見た人に感動を与えられるように努めなければならない。写真と向かい合い、考え続けるという過程は変わっていないのだと思います。残念なことに、良い写真であってもあまり評価しないというのが、今の風潮としてあるようには感じますが。

—— スポーツ写真の場合であれば、被写体が動き続けます。シャッターを動画と同じように切り続けられれば、良い写真が撮れるものなのではないでしょうか。

青木 ずっと撮り続けていると、やはり集中力は落ちますよ。ですから、その競技の大事な所はどこなのかというのをきちんと把握しておかないと、一番大事なシーンを撮り逃してしまうということはあります。

—— 青木さんが、ご自身で撮影した写真で最初に感動したのは、アベベ選手でした。それでは、今回のオリンピックで、ご自身で手ごたえを感じられたのは、どのようなシーンでしたか。

青木 思い出すシーンはたくさんありますね。1枚を選べというのは難しいのですが、選手でなくても良いのであれば、女子バスケットボール日本チームのトム・ホーバスコーチの方を撮ったものです。あのチームを銀メダルに導いたのは、やはりホーバスコーチの力が大きかったと思います。その方の表情が、表彰式が終わった後は、それまでに見たことがないほど和らいだものだったのです。すべてをやり遂げたという安堵感に包まれていたのだと思います。その後に、「今日撮りたいいちばん良い写真はこれです」と言って、彼に写真を渡しました。すぐに「ありがとう」と返事をして頂きました。

—— カメラマン冥利というところでしょうか。

青木 けれども、この大会ばかりは、もっとやれたことがあったのではないかなという気持ちが強く残っています。自国開催ということで、日本人選手が多く



JOC オフィシャルカメラマンにはメダルが授与された



選手の集合写真は、公式写真集の重要な1枚となる

出場している。すると、必ず撮らなければならない写真というものが出て、それが制約になった部分はありました。もしも「仕事の写真」と、「自分の写真」という分け方があるとするなら、どうしても「自分の写真」は後回しになりますから。

—— 屋内会場などは、撮影ポイントによる、運、不運のようなものはあるのでしょうか。

青木 それはつきものです。それよりも試合の展開を読むことが大切だと思います。例えばバレーボールでは、私は木村沙織選手がサーブをするシーンが美しいと感じていたのですが、試合展開によっては、サーブをする数がとても少なくなってしまうこともあります。会場の問題であれば、今回はやはり無観客という難しさがありました。と申しますのは、観客が入っていると、その服装の色とりどりが、アウトフォーカスになった時に綺麗に見えるのです。ところが今回は無観客で座席の木の色が一面に広がっている。すると選手が映えないのです。これは残念でした。アスリートというのは、動く芸術品だと思っていますから。

—— その他にも、お気に入りのカットはありますか。

青木 リオ大会なのですが、内村選手が得意とする鉄棒の写真です。鉄棒は手の競技なので彼の手を映像の中に残したいと思いつき、10秒位の間彼の手に全神経を集中して撮影しました。手にだけピントを合わせての一枚撮りです。体操というのは凄腕の競技で、大会が開かれるごとに、演技がもの凄腕の勢いで進歩しています。昔は「ウルトラC」が凄腕と言っていた。今はもう「ウルトラF」です。その進歩が目で見えて解ります。何でそんなことができる人がいるのか？もしかしたら遺伝子の中に秘密があるのかもしれない。

—— そうすると、撮られた写真の枚数も相当なものになりますね。

青木 いえ、15万カットくらいのものでしたと思います。わが社の中では、私がいちばん少なかったのではないかな。

—— それは膨大だと思います。今回はさまざまな仕事から離れて、自由なお立場で写真を撮られたと…。

青木 いや、写真を撮ることが私の仕事です(笑)。

—— 北京冬季オリンピックでの活躍をお祈りします。今日はどうもありがとうございました。

(2022年1月18日(火)) (株) アフロにて、聞き手／伏見行介理事、構成／出版広報委員・池口英司、撮影／出版広報委員・川上卓也)



激しく動く演技の中で冷静に動く手に、内村航平選手の凄腕と執念を感じたという(2016年 リオオリンピック 写真提供・アフロ)

令和の時代のスナップ撮影に必要なこと ～「オキテ」とアップデートのススメ～

佐々木広人 (株式会社キュービック エディトリアルデスク ゼネラルマネージャー/元『アサヒカメラ』編集長)

スマホやSNSの普及によって、多くの人が写真を日常的に楽しむようになりました。しかし、インターネット上で写真が公開されることが多くなると被写体の権利が社会で強く意識されるようになりました。肖像権は明確な基準がなく炎上騒動やトラブルが多く発生しており、「もはや街中でスナップ写真は撮れない」などという言葉も聞かれます。どうしたら良いのでしょうか? 『アサヒカメラ』編集長時代、写真に関わる諸権利の特集記事を通して問題を提起した、佐々木広人氏 (株式会社キュービック エディトリアルデスク・ゼネラルマネージャー) に3回の連載で執筆していただきます。 (著作権委員会)

『アサヒカメラ』が「肖像権問題」を初めて取り上げたのは2016年秋のこと。月例写真コンテストの記事で掲載した作品がTwitterで炎上したことがきっかけだった。「変身」と題したカラープリント作品は、広い公園でカッターを被ろうとする男性やメイクに動しむ女性らを撮影したスナップ写真。まさにコスプレイヤーが「変身」する前の様子を捉えたもの。とはいえ、肌を露出した人はなく、顔は識別できない程度だった。

ところが、読者の一人がTwitterに「こんなシーンは撮られたくないな」と投稿するや、作品やアサヒカメラへの批判が瞬く間に拡散。編集部には抗議のメールも寄せられた。批判の声をあげたのはコスプレの愛好家たちとみられるアカウントからの発信が多かったが、「撮影された本人」とみられる人物からの抗議はなく、発信も見当たらなかった。

だが、私がそれ以上に気になったのは、「批判の内容」だった。特に注目したのが「肖像権侵害だ(それは犯罪行為だ)」「こんな盗撮犯罪は許せない」という類の発言……すでにお察しの方も多だろう。肖像権や盗撮犯罪の構成要件はもとより、定義や民事・刑事の違いもわからぬ人たちが声高に批判していたのだ。

●誤解と萎縮による負のスパイラル

『アサヒカメラ』の記事でも再三触れてきたが、「盗撮」には二つの意味がある。一つは辞書的な意味での「盗み撮り・隠し撮り」。これ自体が即座に犯罪行為になるわけではない。

もう一つはいわゆる「迷惑防止条例」が規定する犯罪行為としての「盗撮」だ。その構成要件は▽人を著しく羞恥させる、または不安を覚えさせる▽撮影対象が「通常衣服で隠されている」「下着または身体」▽「撮影した」または「撮影目的でカメラを差し向けた(設置した)」。駅や映画館で「盗撮は犯罪です」といったポスターを見たことがある人も多いだろう。それらはワイセツ目的の迷惑防止条例違反や映画の著作権侵害を想定しての警句で

あって、一般的なスナップ撮影とはまるで別物だ。とはいえ、盗撮という言葉が法律や条例という文脈とは無関係に、独り歩きしている現実が浮かび上がってくる。

「盗撮だ」ということで警察官が駆けつけてトラブルになった事例も枚挙に暇がない。しかも、この現場を目撃したというSNSユーザーの書き込みが話をややこしくする。盗撮や肖像権侵害で警察が来た、などと堂々と書き込むものだから、呆れてものが言えない。

その点、駆けつける側の元警察官の話は興味深い。

「110番通報されたら警察官は駆けつけざるを得ないんです。疑うのは迷惑防止条例違反と軽犯罪法違反。撮影者に写真を削除するようにお願いすることもあります」

まともな写真ならば削除要請するいわれはない。なぜお願いするのか?

「その場を丸く収めるため。問題がないと判断したら、警官だって早く戻りたい。いつ重大な事件が起きるかわからないからね」

警察官だって民事不介入の原則は百も承知なのだ。

こうした現場を目撃した人が、当事者どうしの詳細なやり取りを見て、かつ正しい法律知識をもって事の次第をSNSに書き込むならまだマシだ。だが、現実には無知と思い込みをもとに書き込んでしまう。誤解が拡散されることで、撮影者はますます萎縮せざるを得ないのだ。

SNSの時代は情報は玉石混交。「悪貨は良貨を駆逐する」の故事よろしく、情報の正確さよりも「声の大きい人」の情報が目立つ傾向にあることはみなさんご存じだろう。そんな時代でスナップ撮影を行うためには、撮る側も撮られる側も法律・条例、肖像権を正しく理解することが必要だ——そんな思いを募らせ、肖像権問題の企画を進めることを決断したのだった。

●「街の人」肖像権侵害事件が与えた影響

それでも法律や条例の話は「刑事」だけに比較的わかりやすい。だが、肖像権侵害はそもそも判例が少なく、弁

護士によっても解釈が分かれやすい。今でも覚えているが、肖像権に関する取材を始めようとしたが、快く応じてくれる弁護士は少なかった。ようやくたどり着いたのが、みずほ中央法律事務所の代表弁護士・三平聡史さん。法律面での御意見番としてサポートしてもらうことで、一連の『アサヒカメラ』の肖像権、著作権、撮影マナー問題のシリーズ企画がスタートした。結果、3年以上にわたって名物企画として続くことになった。

長々と企画の経緯を綴ってしまったが、実はこうした経緯自体に、現在も続く「スナップ撮影の肖像権問題」が凝縮されていると言っていい。そもそも街のスナップ撮影で肖像権問題が真正面を論じた判例は極めて稀で、話題になったといえ、2005年9月に東京地裁で下された「『街の人』肖像権侵害事件」ぐらいだ。

歩行中の女性の全身を承諾なく撮影した写真がWEBサイトに掲載された。その後、トリミングされた写真がインターネットの掲示板に載ったことで女性に対する誹謗中傷の書き込みが急増。これを見た女性が撮影者とWEBサイトの運営者に対して慰謝料を請求したところ、東京地裁が肖像権侵害を認め、慰謝料の支払いを命じた——というのが事件の概要だ。この判決の反響は大きかったようで、写真界では「街のスナップ撮影で人物の顔が写ってしまうのはまずい」と委縮するムードが高まったという。だが、判決文を読むと、この事件特有の状況があったことがうかがえる。

まず、女性の衣服の胸元のデザインに「SEX」の文字があしらわれていたこと。そして、それを面白がった何者かが顔から胸元の範囲をトリミングして掲示板で「ネタ」にしたこと。事実、判決文でもこのデザインの特徴に触れ、「一般人であれば、撮影されることを知れば心理的な負担を覚える。撮影されたり、ウェブサイトに掲載されたりすることを望まない」という主旨の指摘をしている。

仮定の話にはなるが、もし衣服のデザインが違っていたら結果は大きく異なっていたかもしれないし、撮影者に「一定の配慮」があれば掲載を回避できたかもしれない。

●撮影者に必要なオキテとアップデート

実はこの「一定の配慮」こそが、スナップ撮影において最も重要だと私は考えている。

週刊誌が被告の法廷での様子を隠し撮りした写真を掲載して肖像権侵害の有無が争点になった裁判。この最高裁判決(2005年11月)では、肖像権侵害の基準は「被撮影者の人格的利益の侵害が、社会生活上受忍の限度を超えるか否か」としている。ひっくり返して考えれば、撮影者が被写体側の受けとめ方を想像できるかどうかが重要だというわけだ。

とはいえ、想像力には個人差がある。法廷闘争はもちろん、いたずらに批判されるのも避けたい人も多いはず。そこで指摘したいのが、『アサヒカメラ』2016年11月

号の記事で言及した被写体側の「オキテ」の存在。コスプレイベントや祭事などでは、撮影に関する暗黙のルールのようなもの(オキテ)が存在する。記事ではこうした存在を把握し、被写体となり得る人々と上手に折り合いをつけながら撮影することを推奨した。これを「一定の配慮」と言い換えてもいいだろう。

面倒くさく感じる人もいるだろう。だが、他ジャンルの撮影を想像してほしい。たとえば、動物や風景の撮影では、生態や環境について事前に把握することも多いはず。いわば、いい写真を撮るために相手を知るという「お作法」だ。街のスナップであれば、街の歴史や人々の生態、暮らしを知る、あるいは当事者的に飛び込んでみる。見方を変えれば、撮影マナーにも通ずる話と捉えることもできよう。

こうした見立てには異論があるかもしれない。逆に「オキテ」を無視して、時に街と「敵対」しながら衝撃的な瞬間を追い求めたい人もいるだろう。だが、そういう人は炎上覚悟で臨むしかない。一般市民にとっての写真のメジャーな「主戦場」は、今やSNSをはじめとするインターネット空間に変わったのだから。

かつての主戦場は紙媒体で購入しないと読めないという点で閉鎖的だったが、そんな時代はとくに過ぎ去った。今や雑誌や写真集、写真展はSNSなどの告知・宣伝を抜きにして集客するのは困難だ。確かに現代の表現空間は炎上と背中合わせというリスクはある。それでも写真の素晴らしさを伝えたいのであれば、多少なりとも適応するのが望ましいのではないか。

時代を撮ろうとする者は時代を知ってこそ撮ることができるだろう。その意味で今の時代のスナップ撮影に必要なのは、撮影者の知識と感性のアップデートだと思う。SNSなどの仕組みを知るだけでなく、市民意識の変化、ジェンダーを始めとする人権意識やコミュニティーの在り方……ソフト・ハードの両面で「現代」を知る努力が必要。さもなくば作品を世に送り出し、共感してもらうことは極めて困難な時代になった。それが「令和」の写真表現の「お作法」だと私は考えている。

佐々木広人(ささき・ひろと)

株式会社キュービック エディトリアルデスク・ゼネラルマネージャー／株式会社アーク・コミュニケーションズ取締役



役／専修大学講師／一橋大学卒。リクルートを経て朝日新聞社に入社。『週刊朝日』副編集長、『アサヒカメラ』編集長、「AERA dot.」編集長、雑誌本部長などを務め、2021年7月に退社。『アサヒカメラ』の肖像権や著作権の特集が話題に。2012年新語・流行語大賞大賞トップテンを受賞した「終活」の発案者でもある。

写真の街「銀座」 界限を歩く

鳥原 学 (写真評論家)

Toriyama Manabu

◎銀座で写真展を

写真展巡りを楽しみにしているその立場から言えば、銀座界限は今なお東京における中心地だ。確かにカメラメーカー系のギャラリーは減り、デパートでの大規模もほぼ無くなった。だが、多様な展示施設があって、見られる表現の幅は広い。展覧会を訪ねて銀座を歩くと、いつも新鮮な時代の空気を感じられるのだ。

とくに楽しいのは、現存最古の美術ギャラリーである8丁目の「資生堂ギャラリー」から「銀座メゾンエルメス・フォーラム」(5丁目)を経て、「シャネル・ネクサスホール」(2丁目)など有名ブランドが運営する施設をはしごすること。ちょっと敷居が高く感じられても、非日常的な空間で作品をゆっくり眺めることができ、気分が良い。

昨年9月から10月にかけて、ネクサスホールで開催されたギイ・ブルダン展「The Absurd and The Sublime」も印象に残っている。巨匠ファッション・フォトグラファーの歩みを紹介するもので、空間構成に工夫を凝らし、銀座に似合う華やかな展示だった。マン・レイに師事したブルダンの作品には、シュルレアリスムの影響が強い。ファッション写真が常に最先端の美術をその伝統に取り込み、表現をアップデートさせていく過程が見えてきて面白かった。

東に少し足を延ばし銀座通りを歩いていくと、今度は京橋1丁目の角に、まだ新しいアーティゾン美術館

が見えてくる。かつての西洋近代絵画を展示するブリヂストン美術館だが、ビルの建て替えを機に2020年1月に名前を改めている。そのさい展示や作品収集の範囲を広げ、現代の写真作家も取り上げるようになった。

1月10日まで開催されていた「M式「海の幸」—森村泰昌 ワタシ

ガタリの神話」もそのひとつだ。今回森村は、同館の主要な収蔵作品、明治期の夭逝の画家青木繁の「海の幸」をモチーフとしたセルフポートレート作品「M式『海の幸』変奏曲」を発表した。それは円環状の空間に設置された、太古から未来までの時代設定による10点の連作は、消滅と再生を繰り返すという輪廻転生を描きだしている。絵画、小説、アニメなどを援用した重層的なイメージのコラージュによる、森村流神話の構築である。その意図はタイトルにも表れている。星野道夫の遺作となった、北極圏における人類の創世神話を追った『ワタリガラスの神話』を連想する写真好きもいるはずだ。

興味深いのは、森村がスタッフを使わず、この大作を彼一人で撮影している点だ。コロナ禍によって人との接触ができなくなったのを機に、自身の制作の原点へと回帰するという意図があったという。展示では、ラフスケッチから始まり、使用した小道具や撮影の模様を記録した動画も公開されている。制作プロセスを見せたうえで、メインの大作に誘導し、より深く多様な鑑賞体験を与えようという意図なのだろう。森村という作家の、過剰なほどのサービス精神というか啓発精神の過剰さには、いつも驚かされる。



アーティゾン美術館 森村恭昌展 フライヤー



「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2021」 展示風景 撮影・高倉大輔

◎新しい表現の風景を見る

興味深いことに、アーティゾン美術館では学生から鑑賞料金を徴収しない。上記の森村展もそうだった。美術や写真を学びたい若い層にとって、これはとても嬉しい制度に違いないが、なぜかあまり知られていない。じつに残念なことだと思う。

振り返ってみると、写真ギャラリーや美術画廊、あるいは大型の展示施設が多くある銀座界隈は、昔から若者たちにとって学びの場だった。かつては週末に画廊巡りをする学生の姿をよく見かけたものだが、彼らの多くは、この街でいつか個展を開催することを目標としていた。

その数は減ったものの、若いクリエイターに舞台を提供し続けている有力な場所はいまもある。例えば、1990年代初頭から、数多くの写真家を輩出してきた公募展「1_WALL」を主催する「ガーディアン・ガーデン」(7丁目)の活動はよく知られている。半年に一度開催されるこの展示は、若い世代が写真に何を求めているのかをいつも教えてくれる。

新しい動きとしては、昨年10月後半に京橋から東京駅や日本橋までの区域で開催された、「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2021」を挙げておきたい。「日本の写真文化・これからの写真の未来について考える」をテーマに掲げる都心には珍しい地域型のイベントで、公開空地の壁面(工事現場の囲いなど)を利用した写真展「Tokyo Photographers Wall Magazine」のほか、写真集や小冊子を販売する「Photo Market」、美大生や写真学生を対象にしたコンペの「Student Project」、海外の写真関係者をゲストとするトーク・イベントなどのコンテンツが充実していた。

私がイベントを見に行ったのは、秋晴れに恵まれた土曜の午前。まず銀座通りに面した複合施設、東京スクエアガーデンに置かれた案内所に向かった。そこで展示マップを受け取り、尾仲浩二、石川直樹、インベ☆カオリ、藤岡亜弥など、東京を撮っている26名写真家の作品を探して歩き始める。そしてメインストリートの裏手でそれらを見つけ、しばし眺めていると、奇妙な気分



「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2021」 展示風景 撮影・高倉大輔

になっていく自分に気づく。極めてモダンな都市景観と、写真家が様々な角度から描出する人間の多様な欲求や葛藤が重なり、視覚的な不協和音として生理を刺激してくるのだ。

さて、あちこち歩き回った後、案内所に戻ると「Photo Market」が賑わっていた。今回は、10組ほどのグループが会議机に写真集を並べ、客もそれなりに集まっている。同日には東京都現代美術館で「TOKYO ART BOOK FAIR 2021」が開催されていたから、こちらにもその参加者たちが流れてきているのかもしれない。写真表現がより個人的なものとなった現在、こうしたリアルな場での、水平的な交流がより求められていることを実感する。

かつて銀座界隈は表現者を目指す若者たちにとって、学びの場であり目標の地だった。いま、その風景は大きく変わったものの、地域の性格自体は変わっていないように思う。もともとこうした屋外での体験型写真イベントは、観光客の誘致と地域の再発見を目的として、地方でよく開催されているスタイルだ。それを消費文化の中心であり、しかも展示施設が充実するこの銀座界隈で開催することは、とても挑戦的だ。こうした試みが回を重ね、かつ充実度を増していくと、日本の写真文化はより活気づいていくに違いない。



「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2021」 展示風景 撮影・高倉大輔



「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2021」 展示風景 撮影・高倉大輔

「日本写真保存センター」調査活動報告(36)

—原爆被災を記録した写真原板の保存の意義を検証する—

写真保存センター委員会

■広島原爆投下直後を撮影した松重美人の 写真原板を収集

松重美人(まつしげ・よしと 当時、中国新聞社写真部員・中国軍管区司令部報道班員、32歳、1913～2005)の原爆投下直後の被災状況を捉えた写真原板の劣化を恐れていた写真保存センターでは、数年前から管理者の中国新聞社と保存の必要性を話し合っていたところ、2021年3月26日、広島市教育委員会が市の重要文化財として指定し、恒久的な保存を図ることを決めた。その待望の松重の写真原板が、この度「日本写真保存センター」に寄託され、長期保存することになった。

広島原爆投下直後の被災状況を伝える写真原板は、長らく松重自身で保管されていたため、写真原板の一部に経年劣化が見られ、管理者の中国新聞社から、「日本写真保存センター」の恒久的な保存に適した相模原の収蔵施設での保管を委ねられることになった。

日本写真家協会が「日本写真保存センター」を立ち上げてから15年になる。この間に山端庸介(やまはた・ようすけ 当時、西部軍管区報道班員、28歳、1917～66)が1945年8月10日に撮影した長崎原爆の凄惨な被爆状況を捉えた写真原板を含む308点をいち早く収蔵した。

今回、松重が1945年8月6日の午前11時過ぎから午後4時頃までに撮った、広島市の被爆直後の写真原板5点(6×6判)と、さらにその後見つかった被爆地の写真原板9点を加えて受け入れることにした。10月8日、中国新聞社の岡田浩一編集局長がこの14点の写真原板を保存センターに持参された。これにより被爆記録としての写真原板の重要性が広く認知され、保存

の意義がより一層確実なものになった。

原爆による被災状況を捉えた写真は米軍 GHQ のプレスコードで、1952年の講和条約締結まで公表することができなかった。これをすり抜けて公表したのが、中国新聞社の別会社『夕刊ひろしま』(1946年7月6日付)が掲載した松重の2枚だった。

私は38年前の1983年7月16日に、広島で松重氏にお会いしインタビューをした(会報64号掲載)。原爆が投下された日のことを次のように語った。「朝の6時ごろ空襲警報が解除され、市の中心から2.7キロメートルの翠町の自宅に帰り、朝食を終えて新聞社へ出勤する支度をしているとき、大量のマグネシウムが眼前で破裂したような青白い光で、一瞬何も見えなくなり、強烈な爆風で後ろの壁にたたきつけられた。」「すぐにミヤシックスとフィルム1本を持って新聞社へと出かけた。周りは爆風で倒れた家が燃えていたり、逃げ惑う人で大混乱。頭髮は焼けちぎれ、顔や腕、背中の皮が火ぶくれ、垂れ下がって地獄絵のようだった。」「写真を撮ろうとしたが、あまりの惨状で撮ることが出来なかった。やっと1枚シャッターを切ったが、2枚目はファインダーが涙で曇り切れなかった。」「その先へは火炎が激しくて進めなかった。フィルム現像は社の疎開先で皿現像し、水洗は近くの小川で行った。」という。「そのような状況下で処理したため、ネガに定着ムラやカブリ・傷が付いてしまった。」「戦後すぐに進駐軍が写真などを探していたため、フィルムは社に置かず自宅で保存していた。」と語り、「被爆の実態は残された写真で後世に伝えてほしい」と言い残されたことが思い出される。

保存センターには、千余年の歴史を負う由緒深い国宝をはじめとする重要文化財の法隆寺、東大寺、唐招提



① 1945年8月6日午前11時過ぎ、爆心地から南東約2.2キロの御幸橋西詰め。倒れた人、うずくまる男女、救護を受ける女学生、警官などが写っている。初出は中国新聞の別会社の「夕刊ひろしま」(1946年7月6日)。「LIFE」(1952年9月29日号)が「世紀の記録写真」原爆炸裂/全米初公開」と全世界に②とともに紹介。



② 午前11時過ぎ、被爆した人たちに変圧器用の油を塗って、痛みを抑える。



③ 午後2時ごろ、爆心地から約2.7キロの翠町の理髪店兼自宅。

寺などの奈良六大寺、大和古寺群を撮影した渡辺義雄、入江泰吉、坂本万七、小川光三ら 17 人の写真家が撮影した写真原板約三千六百点を岩波書店から収集して保存している。これらはわが国にとってかけがえのない貴重な文化財の写真群である。

原爆被災を捉えた松重の「ヒロシマ」と山端の「ナガサキ」の写真は、世界で初めて戦争で使われた原子爆弾による被爆記録であり、国はもとより世界の記憶遺産として末永く保存される必要が求められる。(記／松本徳彦)



④ 午後 2 時ごろ、爆風で吹き飛んだ窓枠。⑤ 午後 4 時過ぎ、爆心地から南東約 2.3 キロの広島地方専売局前、被災者に「罹災証明書」を書く字品署の警察官。『LIFE』誌に 1 頁大で掲載される。



※原爆写真の関連資料「歴史の証言—いま原爆写真は！」(会報 64 号：1983 年 9 月発行)、「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾—被爆から 70 年—」

写真展図録(2015 年 8 月 4 日～30 日、JCI フォトサロン)

■日本写真保存センター所蔵原板活用

1. テレビ番組での利活用

最近の日本写真保存センター(以下：保存センター)における所蔵原板の活用として特筆すべき点は、多くの人の目に触れるメディアへの画像提供が挙げられる。保存センターの所蔵する原板が社会的に意義のあるものであることを広く周知し、その価値が認められた。

2. J:COM への画像提供

放映日は東京地区として 2021 年 3 月 25 日(木)、同 3 月 30 日(火)、神奈川地区は 3 月 29 日(月)、3 月 30 日(火)の計 4 回放映が行われ、保存センターの原板からスキャンしたデジタル画像 7 点を提供した。画像の出典は、上野公園花見篇(名取洋之助)浅草寺宝蔵門篇(写真協会)、横浜港航空写真篇(吉田 潤)、関内駅篇(浅野 隆)。一例として関内駅篇では、1948～58 年に横浜市警、神奈川県警に勤務し写真撮影に従事した浅野 隆「横浜・あのころ 飛鳥田市長」(1964 年ごろ撮影)から、関内駅周辺の過去の画像を提示し現在の場所がどこかをクイズ形式で視聴者に問いかけながら過去の様子を解説するもので、撮影後五十数年が経過した町の様子の変り映えを紹介していた。

ケーブルテレビ大手 J:COM へは織作峰子会員の紹介で、J:COM 側で画像活用の企画が立ち上がったことによる。



撮影者・浅野 隆、撮影年月日・1964 年(推定)、撮影場所・神奈川県横浜市中区 横浜市庁舎

3. NHK への画像提供

令和 2 年度事業として保存センターのデータベースは、国会図書館開設で国内の各機関が保有する多様なコンテンツ検索のポータルサイト「ジャパンサーチ」と連携をしたことで活動への問い合わせが増加傾向にある。それとの関連性は定かではないが、令和 3 年に NHK から「NHK スペシャル～新・ドキュメント太平

洋戦争 1941 開戦(前編)」への画像提供の依頼があった。

放映日は 2021 年 12 月 4 日に地上波で放映が行われ、NHK オンデマンドでも 2022 年 12 月 1 日まで配信されている。保存センターからは原板からスキャンしたデジタル画像 47 点を提供し、14 点が番組で使用された。画像の出典は主に、内閣情報部(内閣情報局)により編集・刊行されたグラフ誌『写真週報』で一般的にその目的は国内向けの国策宣伝とされている。番組の内容は、日米開戦前の国民心理の変容を最新の文献研究を紐解きながら紹介するもので、支那事変以降の市民生活の苦境が進展するにつれ開戦の心配をしていた国民の心境が開戦肯定へと揺れ動いていく様を描いている。

4. 今後の課題

J:COM、NHK 共に保存センターの活動を周知するうえでは大きな役割を果たした。特に NHK スペシャルは多くの国民に親しまれている番組で今後も更なる続編の放送が期待される。

しかしながら、NHK スペシャルの文脈では日米開戦を肯定するに至る情報操作の戦時資料として使用された感も否めない。確かに『写真週報』はその出所からも国策プロパガンダ誌であったことは明らかである。しかし、その撮影に従事した写真家らが、必ずしも同じ気持ちで撮影をしていたという確証はない。マグナム創設の理由である「写真家の権利と自由」を JPS として担保するためには、過去の写真がどのように理解されるべきかを調査によって明らかにする必要がある。そのためにも原板の利活用と並行して保存センターにおける調査活動を深耕させることが必要となった。

(記／写真保存センター委員・寺師太郎)

2021 年第 16 回「名取洋之助写真賞」決まる

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している 36 歳までの写真家を対象とした「名取洋之助写真賞」の第 16 回選考会を、過日、山田健太（専修大学教授）、清水哲朗（写真家・JPS 会員）、野町和嘉（写真家・JPS 会長）の 3 氏によって行いました。今回は、2020 年にコロナウイルス感染拡大のため募集を取り止めた事により、2 年ぶりの選考会となりました。通常、応募規定の年齢制限は 35 歳までですが、今回は昨年を考慮して 36 歳までとしました。応募はプロ写真家から高校在学中の学生までの 26 名 26 作品。男性 15 人、女性 11 人。カラー 15 作品、モノクロ 8 作品、モノクロ・カラー混合 3 作品。1 組 30 点の組写真を厳正に選考し、最終協議の結果「名取洋之助写真賞」に川嶋久人「失われたウイグル」と「名取洋之助写真賞奨励賞」に喜屋武真之介「母と、子」の受賞が決まりました。



選考風景 写真左から清水哲朗、野町和嘉、山田健太の各氏

○最終選考候補者

- ・喜屋武 真之介「母と、子」
- ・川嶋 久人「失われたウイグル」
- ・鈴木 竣也「Đôi đôi ドイドイー 未来を変える為に」
- ・齊藤 小弥太「サンディマンディラム - 終の家 -」

■ 2021 年 第 16 回「名取洋之助写真賞」受賞



川嶋 久人（かわしま・ひさと）1986 年 千葉県生まれ。35 歳。

2016 年 3 月 日本写真芸術専門学校卒業。
IT 業界紙のカメラマン、写真事務所でのアシスタントを経てフリー。
取材費を稼ぐためアルバイトをしながら、写真や文章をマスメディアで発表する。埼玉県在住。

受賞作品 「失われたウイグル」(カラー 30 点)

作品について かつての街は、そこにはなかった。1 年ぶりに中国の新疆ウイグル自治区を訪れた。国旗、警察官、検問所、監視カメラの数が劇的に増えていて、いまではもう完全に自由がない。イスラーム寺院（モスク）は完全に警察の管理下に置かれ、強制収容所も建設された。中国政府は 2017 年春ごろから、テロ対策と称して、イスラームを信仰するトルコ系少数民族のウイグル人に対する弾圧を推し進めた。中国と欧州をつなぐ広域経済圏「一帯一路」戦略を迅速に進めるためには、民族問題のくすぶる新疆は「安定」させなければいけないのである。2017 年ウイグルをテーマにした写真展を行った際「ウイグルを取り巻く環境がいくらか厳しくなろうとも、彼らの日々の暮らしにおける文化、伝統はそう簡単に失われるものではない」と書いたが、そうではなかった。現在彼らの宗教的権利、文化的権利、そして人権は中国政府によって急速に奪われている。

受賞者のことば 名取洋之助写真賞を受賞することができ大変光栄に思います。新疆は安易に写真家と名乗ることはできない政治的状況にありますが、それでもカメラを首にさげた私を受け入れてくれたウイグルの方々に感謝しています。ここ数年ウイグルの状況は悪化の一途を辿っていて、さらにコロナ禍も加わり現地の情報が全く伝わってきません。この受賞を機にウイグルは終わりではなく引き続き撮影をしていかなければいけないと思っています。

■ 2021 年 第 16 回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



喜屋武 真之介（きゃん・しんのすけ）1985 年 沖縄県生まれ。36 歳。

2009 年 京都大学文学部中退、毎日新聞社入社。2014 年から写真部に所属し、仙台駐在などに赴任。
2021 年からは沖縄駐在。2018 年 東京写真記者協会 奨励賞。

受賞作品 「母と、子」(モノクロ 30 点)

作品について 「児童虐待」という言葉が定着して久しい。児童虐待の事件が報道されるのは、ごく一部。事件化せず苦しみの中を生きていく子どもたちの姿を知る機会は少ない。この作品で撮影した女性はシングルマザーだった母親に幼い頃から虐待されて育った。精神的に不安定な母親が自死。女性は児童自立支援施設に入ったが、中学卒業後は施設を出て、知人宅を転々としながら、荒れた生活を送る。そんな中で身ごもった女性は、周りの反対を押し切り、21 歳で長男を出産した。そして「虐待の連鎖」を繰り返す始末。「子どもを愛したい。でも愛し方がわからない」。母と重なる自身の行為に後悔を繰り返しながら、手探りで子どもと向き合う日々を、妊娠中から長男が 5 歳になるまでの約 5 年半をまとめた作品。寄り添い、傷つきながら生きる母子の姿を通じ、児童虐待の残す心の傷の深さと解決の難しさを伝えたい。

受賞者のことば 5 年以上かけて母子を撮りながら、友人として微力ながらサポートを続けてきました。「親」になろうと暗中模索する彼女に心打たれる一方、時に苛烈に子どもに接する姿に児童虐待が残す影響の根深さと、日本の支援制度の心許なさ、そして私自身の無力さを何度も感じてきました。この作品が、児童虐待の加害者も被害者も生み出さない社会に近づく小さな助けになることを願っています。素晴らしい賞を頂きありがとうございました。

2021年 第16回「名取洋之助写真賞」総評

野町 和嘉(写真家・公益社団法人日本写真家協会会長)

ウイグル自治区において100万人近いウイグル人が強制収容所に入れられ、洗脳や心理的拷問が行われているとして、今年(2021年)になって、欧米を中心に痛烈な中国非難が叫ばれるようになった。

川嶋久人さんは、そのウイグル自治区に2010年以来毎年のように通い、人々の暮らしの周辺に徐々に迫ってくる弾圧の片鱗やその気配を丹念に撮影してきた。ほぼ時系列に沿って組まれた30点で構成されたストーリーの後半部分は、「ウイグル問題」に集中した写真が大半であるが、早い時代の作品では、ウイグルの伝統的で伸びやかな暮らしと向き合っており、本来は民族文化への深い共感から始めた取材であったことがうかがえる。華やいだ民族文化で盛り上がっていたバザールや祈りの空間が、数年後には監視の目が光る息苦しい空間に成り果ててしまっていることなど、年月をかけて見つけたことで、写真の持つ記録性が遺憾なく発揮された優れたドキュメンタリーとなっている。

名取洋之助写真賞奨励賞作品、喜屋武真之介さんの「母と、子」は、正直言ってやや恐怖を感じさせるストーリーである。世代を跨いだ児童虐待連鎖の中で苦悶する母と子を、5年半にもわたって見つめてきたその執念には頭の下がる思いだ。ただプリント仕上げて配慮が足りず、写真のディテールにしっかりこだわっていれば、より深い人間性があぶり出せたのではないかと惜しまれてならない。

清水 哲朗(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会員)

昨年度が募集中止となり2年ぶりの選考。世界的にコロナ禍におかれている現在、国内の現況を捉えた作品が多く出てくると予想していましたが、結果的には数える程度。傾向としては世界の報道写真の潮流を意識したアート表現寄りのスタイリッシュ作品もありましたが、表層的で踏み込みが甘く、写真的には美しいけれどその環境に置かれる人々の背景が見えてこない感情に響いてこないもどかしさを感じました。また人物の顔を連続的に並べる場つなぎ、数合わせ的な構成が目立ったのは30枚組



募の厳しさとドキュメンタリーを伝えるメディアや指導者不足を危惧しました。

名取賞受賞の川嶋久人さん「失われたウイグル」は現地へ何度も足を運び、時間をかけた取材と構成力、美しいプリントで激変した日常を丁寧に描いています。穏やかだった日々から静かに転調、自身もいつ拘束されるかわからない中で取材した2018年の作品から伝わってくる「恐怖・不自由・無力感」は胸に迫ってきました。前回も最終選考候補に残った実力者だけにイメージ破りのない30枚組は内容、構成に抜群の安定感がありました。奨励賞の喜屋武真之介さん「母と、子」は繰り返される児童虐待、自傷行為、貧困に苦悩する親子を長期的に追った深みのあるストーリー。プリントを丁寧に仕上げ、細部まで階調を見せていたら、さらなる高評価をした可能性もありました。

山田 健太(専修大学教授)

2年分の応募点数ということで一昨年は大きく上回るのか、移動を厳しく制限される中で逆に減ってしまうのか心配をしていたが、おおよそ例年並みの応募数と聞き安堵した。ただし、このコロナ禍をどう切り取るのかとの期待については、正面から扱ったのは1作品のみで、むしろ来年以降に持ち越しの課題といえよう。

そのなかで、この2年間の巣籠りも生活によって、より深刻化しているとされる家庭内の課題を母子の日常を通じてストレートに訴えたのが奨励賞の作品だ。加えて撮影地の沖縄は子どもの貧困でも全国最悪レベルといわれる中、いま伝えるべきことを、いま伝えるというジャーナリズムの原点を感じさせた。

名取賞の作品も長期の継続取材によって、ウイグルの監視社会化を見事に捉えたもので、全員一致の受賞だった。一言でいえば完成度の高さといえようが、テーマの明確性、生活そして個々人の人権へと国家が介入するという抽象的な課題を具体化する表現力、さらには組み写真の利点をうまく生かした見る者に対する説得力をみせた。

国内外の取材が大きく制限を受けるなか、応募作にはアフガニスタン、インドほか海外取材の成果が数多くみられ、その若いエネルギーを大変頼もしく思ったが、是非ともコロナとうまく折り合いをつけながら、今後も積極的に「現場」に足を運んでもらいたいとの強い思いをこの作品に込めて、一票を投じた。



「名取洋之助写真賞」について

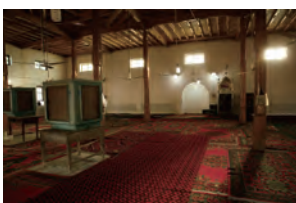
公益社団法人日本写真家協会(JPS)は、社会に貢献する事業として「JPS展」や「日本写真家協会賞」の表彰並びに顕彰を行っています。2005年からは「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950年の協会設立初期から写真企画展への助言。更に、写真著作権の重要性を進言されるなど、さまざまな面で協力を頂いています。没後、名取洋之助に関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、主として若いフォトジャーナリストの育成に役立つことを望み、この写真賞を創設しました。

●名取洋之助(1910～62年) ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛らと33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと「NIPPON」を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画・編集者でもあった。

■ 2021年 第16回名取洋之助写真賞

川嶋 久人 「失われたウイグル」 (カラー 30 点)

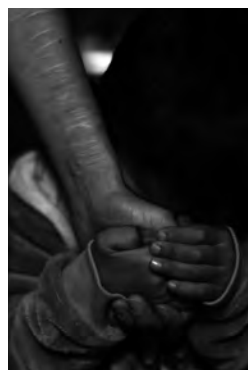
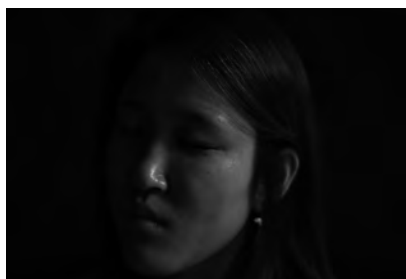
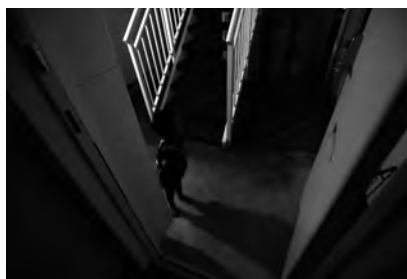
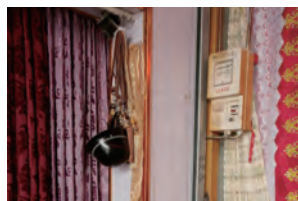


■ 2021年 第16回名取洋之助写真賞 奨励賞



喜屋武 真之介 「母と、子」 (モノクローム 30 点)





第47回「日本写真家協会賞」贈呈式
受賞者：株式会社日本写真企画

第16回「名取洋之助写真賞」授賞式
受賞者：川嶋久人「失われたウイグル」

喜屋武真之介（奨励賞）「母と、子」

第4回「笹本恒子写真賞」授賞式
受賞者：渋谷敦志

名誉会員顕彰式
名誉会長：田沼武能
名誉会員：松本徳彦、水越 武

2021年12月8日（水）JCIIビル6階会議室

新型コロナウイルス感染症の影響で、年末恒例の会員相互祝賀会は今年度も中止となり、出席人数を制限したなかで贈呈式・授賞式・顕彰式をJCIIビル6階の会議室で開催した。各受賞者はじめ、理事役員、外部理事、各委員会委員長・副委員長、賛助会員など71名の出席者で行った。

定刻14時に山口規子常務理事による司会進行で始まり、初めに野町会長から「二年弱の間、人が動けない、集まらない状況で社会が機能しない事態に遭遇し、まさに映画『未知との遭遇』状況で写真界も大きな影響を受けました。創立70周年の準備を進め、式典、写真展は何とか開催できましたが、緊急事態宣言で一般のギャラリーでは打撃を受ける状況となりました。カメラ誌では休刊が相次ぎましたが、今回の協会賞受賞の日本写真企画ではそれは無いとの事です。名取賞、笹本賞の受賞者はドキュメンタリーを歩んでいる3人となりますが、こちらも厳しい現状におかれています。笹本賞受賞の渋谷さんとは19年前に酒の席で、厳しい困難な状況で撮り続けることは修行僧のようなものだとお聴きました。今後の活躍に期待いたします」と挨拶があった。

「日本写真家協会賞」贈呈式

2021年度の第47回「日本写真家協会賞」は、株式会社日本写真企画に贈呈した。本賞は「写真技術に關

する発見、発明、開発において顕著な功績、あるいは貢献、寄与が認められる個人または団体に対して贈られる賞。贈呈理由は、「昭和48年11月の会社設立以来、写真愛好家を啓発する記事を主体とした月刊誌『フォトコン』や季刊誌『写真ライフ』を発行し、プロ写真家の作品と共に、各地で活躍するハイアマチュアの作品を積極的に掲載し高い信頼を得てきた。加えて撮影解説書や良質な写真集を数多く手がけるなど写真界の発展推進に大きく貢献された。その功績に対して」である。

ご出席いただいた株式会社日本写真企画代表取締役社長の片村昇一氏に、野町会長より表彰状と盾を贈呈



「日本写真家協会賞」贈呈式の記念写真



野町和嘉会長の開会挨拶



日本写真家協会賞・株式会社日本写真企画の片村昇一氏へ野町会長から表彰状が贈られた



受賞の挨拶を述べる片村昇一氏



名取洋之助写真賞・川嶋久人氏へ野町会長から表彰状が贈られた



川嶋久人氏による受賞挨拶



名取洋之助写真賞・喜屋武真之介氏へ高村副会長から表彰状が贈られた



喜屋武真之介氏による受賞挨拶



選考委員の山田健太氏による講評挨拶

した。続いて片村氏より「長年の功績を評価されたという事で、現在のスタッフはもとより49年間業務に携わった全ての社員とともに協会賞を受け取らせていただきます。『フォトコン』に至っては現在一番古い写真雑誌となり、皆様から大変多くの支えがあった事を感謝申し上げます。出版業界も不振な一年でありました。切磋琢磨してきた同業者が消えていくのは悲しい思いでした。読者からは温かい励ましの言葉も頂戴しました。この二年間は失ったものもありましたが、気づきの多い期間でもあり、写真愛好家の必要とされるものを作ることが重要だと思いました。創業以来ぶれていないこの考えで、これからも読者に寄り添った本を出し続けることで写真界に貢献いたします」と受賞の挨拶を述べられ、最後に壇上で記念写真撮影を行った。

「名取洋之助写真賞」授賞式

続いて、名取洋之助写真賞の授賞式を行った。新進写真家の発掘と活動を奨励するための賞であるが、今回はコロナ禍での昨年の募集中止を考慮し36歳までとして募集を行った。選考は専修大学教授の山田健太氏、第1回名取賞受賞者の清水哲朗会員、野町和嘉会長の3氏で行い、名取洋之助写真賞は川嶋久人氏「失われたウイグル」、同奨励賞は喜屋武真之介「母と、子」に決定した。

授賞式では、野町会長より川嶋氏へ表彰状と賞金、受賞作品写真集を授与した。続いて高村副会長より喜屋武氏へ表彰状と賞金を授与した。選考委員を代表して山田氏は「川嶋さんはこの賞を切望されていたという事で嬉しく思っております。喜屋武さんは日本で進行している問題に鋭く迫った写真で奨励賞を受賞しました。お二人ともおめでとうございます。選考全体の講評ですが、コロナ禍で内向きの時代にあっては相当数の海外取材の応募があり嬉しく思いました。とりわけ川嶋さんの作品は全員一致で非常に完成度の高い評価でありました。これを足場にさらにチャレンジをしていただきたいと思います。写真をめぐる環境は決して楽観はできず、ドキュメンタリーフォトにおいては、より活躍の場が厳しい状況ですが、今回の受賞は宿命でありチャンスでもあります。ぜひ今後も目指す道を力強く歩んでいただきたいと思います。全体の講評としては、時代性、社会性、論理性、物語性



「名取洋之助写真賞」授賞式の記念写真

を重視してジャーナリストフォトの意味合いでみましたが、今というテーマ性、過去の歴史における現在の写真位置づけが曖昧であるなど、辛口になりますが他の作品には不満が残りました。コロナ禍において内向きになっている中、若い皆様方には外に目を向けて新しい世界に一步を踏み出していただけるよう期待しております。またコロナ禍の作品が1点のみでしたので、内面まで踏み込んだ時代の変わり目を写し取った作品を来年以降期待しています」と講評を述べた。

受賞者の川嶋氏からは「テーマの新疆ウイグル自治区は2009年から撮っています。政治的にも状況は緩く自由があったのですが少しは問題があり、様々に人々と接する事を重ねることで、次第に受け入れられ撮らせていただける状況になりました。2018年前後から状況が一変し、知人であった方々でさえ、よそよそしい対応になってしまいました。2019年を最後に海外メディアの規制は厳しくなり、さらにコロナ禍で行けていません。コロナ終息後には政治的に叶うかわかりませんが、人々のその後の状況取材し、皆様へ伝えたいと思っています」と述べた。続いて奨励賞の喜屋武氏からは「母と子を5年半撮り続けた作品で、生まれてきたくなかったと発する5歳の子どもと、子どもを苦しめる母親の姿を追ったものです。自身も母親から受けたいわば児童虐待の連鎖になります。加害者だけが悪いのではなく、公的な支援や介入だけで解決できるものでもなく、隣近所の家族や人々が思いを寄せて、少しずつ減っていくものだと思います。この作品を見ていただき多くの方に知っていただく事で一



「名取洋之助写真賞」授賞式の会場風景



笹本恒子写真賞・渋谷敦志氏へ野町会長から表彰状が贈られた



受賞の挨拶を述べる渋谷敦志氏



選考委員の佐伯剛氏による講評

助になればと思います」と述べた。最後に記念写真撮影を行い、名取賞授賞式を終えた。

「笹本恒子写真賞」授賞式

笹本恒子写真賞は、わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する目的で2016（平成28）年に創設。今年の選考委員は野町和嘉（JPS会長）、前川貴行（写真家）、佐伯剛（編集者）によって行われ、第4回「笹本恒子写真賞」は渋谷敦志氏に贈った。受賞理由は「ジャーナリズムをベースとしたグローバルな視点と、民族紛争、飢餓、難民、環境破壊といった不条理に晒され、生存を脅かされている、弱者に寄り添った、長年にわたる真摯でアクティブな取材活動とそれから生まれた作品に対して」。

授賞式では、野町会長から渋谷氏へ表彰状と賞金を授与した。選考委員を代表して佐伯氏は「渋谷さんの作品を見たときにスケールの大きさに驚きました。二、三十年くらいの期間で世界の紛争、難民、飢餓などがすべて入っている問題を一人の人間が撮っていることに驚きました。現代における黙示録を、写真で表現しようとしているスケールの大きさを感じました。それだけの場所に個人で乗り込んで行くバイタリティーは素晴らしい。セバスチャン・サルガドとは違い、同じ地球に生きている人間が人間をみる優しいまなざしを感じました。1993年に高校を卒業してから27年間同じテーマで撮っており、カメラを持っていない時も含めて各場所で時間をかけて距離を詰めて、この優しいまなざしの作品が生まれてきているのだと思います」と講評を述べた。

続いて受賞者の渋谷氏から「二十七、八年写真を撮り続けていますが、これまで写真を撮らせていただいた方々、写真を見て頂いた方々、カメラメーカーや写真展、出版制作に携わってくださった方々に感謝申し上げます。ここ数年は精神的に写真がしんどく、写真をやめる理由を探していた時期がありましたが、メーカーギャラリーから大きな写真展の話をいただき、終わるまでは歯を食いしばって頑張ってきました。その状況のさなかにコロナ禍になりました。世界中が自由を奪われた状況でしたが、写真を撮りたい思いが湧いてきました。撮れなかった時間が、深く考える時間を自分に与えてくれました。ワクチン接種後、8月はア



「笹本恒子写真賞」授賞式の記念写真

ルメニアへ、9月はバングラデシュへ、先々週まではウズベキスタンにいました。残りの時間は隔離となりましたが、何とか旅の感覚を取り戻すことが出来ました。バングラデシュでコロナに感染し、ホテル隔離中に笹本賞受賞の知らせを受け取りました。最近取材に行くたびにトラブルがあるなかで、受賞の知らせに励まされました。フォトジャーナリズムは逆風ですが、カメラを持って人に出会って、撮り続けることを一年でも多く続けて行きたいと思います」と受賞の挨拶を述べた。最後に受賞者と選考委員で記念写真を撮影し終了した。

「名誉会員」顕彰式

続いて名誉会員顕彰式を行い、2021年度総会で田沼武能氏（名誉会員・名誉会長）、松本徳彦氏（名誉会員）、水越武氏（名誉会員）の3名が推挙された。水越氏は都合により欠席され、壇上では田沼と松本両氏へ、名誉会員証と名誉会員バッジの記念品が野町会長より贈られた。田沼名誉会員は「JPSは70年が経ち、現在のような形の協会になりました。最近の写真界は少々風向きが良くなってきているとはいえ、嘆いてばかりでは仕方ありません。逆転をうまく利用し写真を新しい形で発展させて行かなければなりません。知恵を出し合って作っていきましょう」と述べられた。続いて松本名誉会員は「私が協会に入って約六十年になります。その間、様々な協会活動をお手伝いすることが出来ました。写真家がどうしたら大きな力を発揮できるかを考えておりました。一人ではなく



田沼武能氏へ野町会長から名誉会員証 松本徳彦氏へ野町会長から名誉会員証
が贈られた が贈られた 田沼武能名誉会長による挨拶 松本徳彦名誉会員による挨拶

集まればいい知恵が出てよい仕事ができるであろうと思います。写真の歴史を編纂や展覧会を行い、日本の写真界とは何なのかを伝えることが仕事だと思い、写真美術館や写真保存センターの設立、運営へとまい進してきました。個々の写真家の利益にはならないかもしれませんが、日本の写真文化の歴史を構築する上では意義あるものだと思います」と挨拶された。

最後に名誉会員バッヂを胸につけ、記念写真撮影を行い終了した。

(記／出版広報委員・小野吉彦、撮影／桃井一至)



名誉会員に推挙された田沼武能氏(右)と松本徳彦氏(左)の記念写真

2021 年度 JPS 役員と賛助会員との懇談会

2021 年 12 月 8 日(水) JCII ビル 6 階会議室

贈呈式・授賞式・顕彰式のあと休憩をはさみ、賛助会員との懇談会を行った。コロナ禍前では例年 9 月に開催していたが、今回は式のあとに開催した。

島田専務理事の司会で進行し、はじめに野町会長から「賛助会員の皆様もコロナの影響があるとお聞きしておりますが、最近は売り上げも戻ってきていると伺っております。オミクロン株は神風だと思っております。インフルエンザの様におとなしく世界中に行きわたれば平常に戻るのではないかと期待しております」と挨拶した。

続いて高村副会長より「2 年ぶりの懇談会で皆様にお会いでき少し安心しております。2020 年はほとんどの事業が中止になりました。2021 年も影響がありましたが、2 月後半から少しずつ動いてまいり、創立 70 周年記念写真展を東京都写真美術館で開催

し、協会賞の表彰式も縮小して行う事が出来ました。新入会員説明会の開催や、延期であった 2020 年分の JPS 展を 2021 年と併せて短期間で開催することが出来ました。新入会員展は入場人数制限で開催し、フォトフォーラムはリモート配信で開催しました」と事業報告があった。

続いて島田専務理事より各会員理事、出席の外部理事、各委員会の委員長と副委員長の紹介があった。

その後、賛助会員の皆様より自己紹介と近況報告、新製品の紹介などを、壇上でマスクを外してお話しをいただいた。コロナ禍での好調製品、新製品やその調達状況などの説明があった。

最後に高村副会長から閉会挨拶があり散会した。

(記／出版広報委員・小野吉彦、撮影／桃井一至)



野町会長による賛助会員懇談会の開催挨拶

高村副会長による 2021 年度の事業報告

出席の賛助会社皆様による近況報告

第4回「笹本恒子写真賞」受賞者・渋谷敦志

受賞記念展「今日という日を摘み取れ」

2021年12月16日(木)～22日(水)
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第4回笹本恒子写真賞の受賞を記念した、公益社団法人日本写真家協会主催・渋谷敦志写真展「今日という日を摘み取れ」を2021年12月16日(木)から22日(水)まで、アイデムフォトギャラリー「シリウス」(東京都新宿区)にて開催した。

笹本恒子写真賞は、わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子(1914年生)名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を日本写真家協会が2016年に創設。第4回は、野町和嘉(JPS会長)、前川貴行(写真家)、佐伯剛(編集者)で選考した。

渋谷氏は、日本の写真界にあって、もっとも精力的に活動をしているフォトジャーナリストであり、人々の中に希望の光を探り当てようと活動を続けている稀有な存在である。今回の受賞は、「ジャーナリズムをベースとしたグローバルな視点と、民族紛争、飢餓、難民、環境破壊といった不条理に晒され、生存を脅かされている、弱者に寄り添った、長年にわたる真摯でアクティブな取材活動とそれらから生まれた作品に対して」というもので、賞の理念と渋谷氏の活動に合致したものとなった。

「作品のテーマは『境界線』です。とはいってもそれは目に見える境界線ということではなく、人間と人間の間にある心の壁であったり、社会の中に潜んでいる差別や、偏見。目には見えないけれども、厳然と存在している境界線ということです。それは、社会が作り出したものではなく、私たちの心の中に在るものが、社会に反映されたものであるのかもしれない。現実存在している壁、フェンス。そのような分断を乗り越えてゆくにはどうしたら良いのか？人と人とが生かしかう関係はどのようなものか？それがテーマです」と、渋谷氏は、撮影の基本を語ってくれた。会場に掲げられたルポルタージュの色濃い作品群は、見る者にさま

ざまなメッセージを投げかけてくる。

「紛争、難民、少数民族。そのような場所で置きざりにされている人がいます。それは個別に発生しているものではなく、その根源はみな同じなのかもしれない。世界で起こっている様々な事象を捉え、自分の心の中でもう一度編み直す。私の取材はそのような気持ちで続けられています」と渋谷氏。

しかし、取材活動は時を経ることに厳しいものになっているという。「世界中で、監視の目が厳しくなっている印象があります。私が人々に向けているレンズと同じメーカーのレンズが、どこからか私を見張っている。現代という時代は、どこか行って、勇気を出して写真を撮れば良いという時代ではなくなっているように感じます。国からの許可が下りない、拘束される可能性もある。状況は日に日に難しくなっているように感じます。もちろん、取材はこれからも続けられたら良いと思っています」。そんな渋谷氏の言葉は、穏やかでも力強いもののように感じられた。

(記・撮影／出版広報委員・池口英司)



展示作品をバックに渋谷敦志氏

略歴：1975年大阪府生まれ。1996年、大学を休学して一年間ブラジル・サンパウロの法律事務所で働く。卒業後、野宿者の実状を取材したルポで国境なき医師団日本主催1999年MSFフォトジャーナリスト賞を受賞。それをきっかけにアフリカやアジアでの取材を始める。現在は世界中の紛争や貧困、難民の問題を写真と言葉で伝えている。JPS展賞、視点賞など受賞。著書・写真集に『今日という日を摘み取れ』『まなざしが会える場所へ―越境する写真家として生きる』『帰郷するブラジル』『希望のダンス―エイズで親をなくしたウガンダの子どもたち』など。



受賞記念展の案内状 DM



展覧会は新宿区の「シリウス」で7日間にわたり開催

第16回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展

名取洋之助写真賞・川嶋久人 「失われたウイグル」
 名取洋之助写真賞奨励賞・喜屋武真之介 「母と、子」

【東京展】2022年1月21日(金)～27日(木)

富士フィルムフォトサロン東京

【大阪展】2022年2月4日(金)～10日(木)

富士フィルムフォトサロン大阪

公益社団法人日本写真家協会 2021 年第 16 回「名取洋之助写真賞」(28～31 ページ参照)の受賞者 2 名による受賞作品写真展を、富士フィルムフォトサロン(東京/大阪)で開催した。写真展を機に受賞者のお二人に、取材を始めた経緯や写真展の感想などを伺った。



川嶋久人氏(撮影・今井孝弘)

名取賞受賞の川嶋久人氏の作品「失われたウイグル」の取材は、2009 年の「ウルムチ事件」(ウイグル人と武装警官、漢人の衝突)に関心を持ち、ウイグルを訪ねたのが始まりだという。「しかし初めはシルクロードの民ウイグル人の伝統的民族文化に魅せられました。丁寧にみてくれたのも心に沁み込みました。それ以来 15 回ほどウイグルを訪ねましたが、警察に通報される危険があったので、私がフォトジャーナリストだと悟られないように注意しました」

2017 年の春ごろから、中国政府による弾圧がさらに激しくなったという。「ウイグル人の宗教や文化的権利、人権が急速に奪われたのです。2018 年の 1 月に、一年ぶりに訪れたときは、状況の深刻さを肌で感じました。外国と接点を持つと強制収容所に入れられる可能性があるため、知人と会うのも憚られました」

「日本の人たちにもウイグル人の置かれた政治的状況をこの写真展でさらに知ってほしいと思います」と写真展のねらいを語ってくれた。「今後はイスラーム社会の混乱の根っこにあるパレスチナ問題と北朝鮮を取材したい。世界中で差別や偏見、憎悪が蔓延していますが、その温床となっている人の心の中にある壁を写真で少しでも低くしたいと思っています」

写真学生へのアドバイスを伺うと、「本を読んでほしい。技術だけではド

キュメンタリー写真は撮れません。『哲学』や『思想』が必要になります。それを内面化するには日々の読書しかありません」と明快な返事が返ってきた。

名取賞奨励賞の喜屋武真之介氏の作品「母と、子」に登場するユミさん(仮名)と喜屋武氏の出会い、当時 17 歳の彼女を写真記者として取材したのが始まりだ。彼女は幼少から母親の虐待を受けて育ち、14 歳で児童自立支援施設を出た後も、荒れた日々を送っていた。取材の後にも彼女の悩みごとの相談相手になるなど交流を続けた喜屋武氏。「ユミさんが 20 歳のときに妊娠し、その時も相談を受けました。子どもが 5 歳になるまで取材したのですが、彼女の世界観、価値観を頭ごなしに否定するのではなく、彼女の目線に立って寄り添うことを心掛けました」。取材の難しさが言葉の端々から伝わってきた。



喜屋武真之介氏

「写真展は初めての経験です。次に繋がるヒントや気付きがあり写真展が出来て本当に良かった」。来場者の反応も刺激になったという。「写真を見てシンパシーを感じたのか涙ぐんでしまう女性もいて、写真が見る人に深く刺さって行くのを感じました」「児童虐待のニュースを聞くと多くの人は、酷い、可哀そう、で終わってしまう。この写真展でその裏にある、加害者の親も子どもの頃は虐待の被害者であるとか、子どもを優しく愛したいけどその方法が分からないなどの、複雑な事情を知ってほしい」。喜屋武氏はこれからもユミさん親子の取材を続けたいという。

川嶋氏と喜屋武氏の写真と言葉からは、フォトジャーナリストの精神が伝わってきた。

(記・撮影/出版広報委員・飯塚明夫)



受賞作品展の案内状 DM



受賞作品を見る来場者(富士フィルムフォトサロン東京)

OM デジタル ソリューションズ

新ブランド「OM SYSTEM」発表
新製品「M.ZUIKO DIGITAL ED
20mm F1.4 PRO」も発売

OM デジタルソリューションズ株式会社は、2021年10月27日に新ブランド「OM SYSTEM」を発表いたしました。ブランド名の命名においては、会社の設立時からこだわってきたフィロソフィーである『OM = 常に困難なことに挑戦し、新しいものを生み出す姿勢』に基づき、唯一無二の顧客体験を提供し続けていくという強い決意が込められています。



この発表に続いて、2021年12月10日には新ブランド下で初の製品となる「M.ZUIKO DIGITAL ED 20mm F1.4 PRO」を発売しました。35mm 判換算で40mm相当、小型軽量で大口径、標準レンズに近い使いやすい画角を持ち、絞り解放からピント面での高解像とアウトフォーカスでの“美しくにじむボケ”を両立し、風景からポートレート、またスナップ写真にも最適なPROレンズです。公開されている「M.ZUIKO DIGITAL」レンズのロードマップには、新たな望遠ズーム「M.ZUIKO DIGITAL ED 40-150mm F4.0 PRO」の開発も発表されております。このように今後も皆様のご期待に沿える、魅力ある製品の開発に全社一丸となり努めて参ります。

【問い合わせ先】

OM デジタルソリューションズ株式会社
オリンパスプロサロン 担当：鳥居
TEL：03-3466-2951
(10:00～17:30 土・日・祝日定休)
<https://www.olympus-imaging.jp/>

ニコン

Zマウント用 NIKKOR レンズ「NIKKOR Z 24-120mm f/4 S」「NIKKOR Z 100-400mm f/4.5-5.6 VR S」「NIKKOR Z 28-75mm f/2.8」を2022年2月に発売

ニコンでは、Zマウント用 NIKKOR レンズのさらなる充実をすすめて、2022年2月に3本のレンズを発売いたします。

●幅広い焦点距離を開放F値4一定でカバーする標準ズームレンズ

NIKKOR Z 24-120mm f/4 S
希望小売価格：154,000円(税込)
2022年2月発売予定(写真下)

●幅広い焦点距離をカバーする NIKKOR Z レンズ初の超望遠レンズ

NIKKOR Z 100-400mm f/4.5-5.6 VRS
希望小売価格：385,000円(税込)
2022年2月発売予定

●小型・軽量ボディの開放F2.8標準ズームレンズ

NIKKOR Z 28-75mm f/2.8
希望小売価格：140,800円(税込)
2022年2月発売予定

ニコンは、今後も新次元の光学性能を追求し、ユーザーのニーズに添えていきます。そして、映像表現の可能性をさらに拡げることを目指し、映像文化の発展に貢献します。

【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン
ニコンカスタマーサポートセンター
ナビダイヤル
TEL：0570-02-8000
<https://www.nikon-image.com>



シグマ

“プレミアムコンパクトブライム”Iシリーズに2本のレンズが登場
隅々までクリアに映しとる描写力とコンパクトネス広角24mm F2(写真左)
あらゆる場面で楽しめる最高品質の常用中望遠90mm F2.8(写真右)



Iシリーズは、ミラーレスシステムに新たな価値を提案するフルサイズ対応のレンズシリーズです。

24mm F2 DG DN | Contemporaryは、開放F値2.0の明るさと高い光学性能を持つその特長をミラーレスシステムに適合するコンパクトなレンズボディにまとめ上げています。

24mmの広々とした画角の中心から周辺までクリアに描写する、高いレベルの光学性能を実現。レンズの明るさも相まって星景・夜景撮影で実力を発揮します。手軽に持ち歩けるサイズ感ながらIシリーズが保証する高品質のボディが、レンズを所有し操作するその体験自体をより心躍るものにします。機材のサイズは最小にしつつ、画質にも道具としての品位にも妥協したくない。そんな撮影者の期待にIシリーズ24mm F2 DG DN | Contemporaryが応えます。

90mm F2.8 DG DN | Contemporaryは、常用できるコンパクトなレンズだからこそ光学性能の高さを重視しています。最新の光学技術を基盤に構成されたSLDガラス5枚を含むレンズ群は、カメラ側では補正できない軸上色収差を中心に抑制。高い解像感と色にじみのないクリアな画質を実現しています。同時に、ミラーレスシステムの利点であるカメラ側の光学補正機能も活用することで、光学系でしか対応できない収差の補正に集中することができ、描写性能の向上とレンズサイズの小型軽量化を可能にしました。さらに、高精度ガラスモールド非球面レンズが高い解像感とボケ味の美しさを両立。色つきのない柔らかな大きなボケを活かしたフルサイズならではの撮影を楽しめます。最短撮影距離は50cm、最大撮影倍率1:5を達成し、主題を引き立てるクローズアップ撮影が可能です。AF駆動系には静粛かつ高速なステッピングモーターを採用し、静止画はもちろん、動画撮影にも適しています。

24mm F2 DG DN | Contemporary
90mm F2.8 DG DN | Contemporary
共に希望小売価格：85,800 円（税込）

【問い合わせ先】

株式会社シグマ

担当：カスタマーサポート部

プロサポート課 桑山輝明

TEL：044-989-7436

メール：spsinfo@sigma-photo.co.jp

https://www.sigma-global.com/jp/special/i-series/

ライカ

“CHANGE TO LEICA” ライカ SL トレードインプロモーションのご案内



ライカカメラ社では 2022 年 3 月 31 日までの期間、他社製のフルサイズデジタル一眼カメラ、または中判ミラーレスカメラ（対象機種は HP 参照）から「ライカ SL2」「ライカ SL2-S」への買い換えをサポートする「CHANGE TO LEICA プロモーション」を実施しています。本プロモーションは、専用サイトから下取りを希望するカメラを登録することで参加できます。登録完了後、購入サポートが受けられる 14 モデル（HP 掲載）のライカ SL システム用クーポン券が登録のメールアドレス宛に送信されます。購入対象製品の新製品購入時、クーポン券 1 枚につき、定価（税別）の 10% 相当分を購入代金に充当できます。クーポン券の使用に関しては、下取り希望のカメラと登録情報をご用意のうえ、ライカストア、ライカブティックおよびライカ正規特約店にて下取り手続きの方法をご確認ください。なお、当プロモーションに参加していないライカ販売店もありますので、事前の確認をお願いします。詳しくはライカの HP、またはライカ製品販売店にお問い合わせください。

【問い合わせ先】

ライカカメラジャパン株式会社

ライカカスタマーケア

TEL：0570-055-844

メール：info@leica-camera.co.jp

http://jp.leica-camera.com/

ケンコー・トキナー

トキナー「SZ 500mm F8 Reflex MF」手のひらサイズ、マウント交換式で登場！

トキナーは、マニュアルフォーカスの反射望遠式レンズ「SZ 500mm F8 Reflex MF」を 2022 年 2 月 25 日に発売。CP+2022 にて展示します。トキナーの伝説的な超小型反射望遠レンズが、デジタル時代に合わせて復活！

500mm を手のひらに載るサイズに小型化した、トキナー「TM500」を現代に合わせて再設計。「SZ 500mm F8 Reflex MF」の登場です。「SZ 500mm F8 Reflex MF」は、ミラーを使用した反射光学系により、500mm の超望遠ながら、驚くほどコンパクトなサイズと軽さを実現したレンズ。T マウント交換式の採用で、ニコン F 用・キヤノン EF 用・ソニー E 用・フジ X 用・マイクロフォーサーズ用・ニコン Z 用のバリエーションを揃えました。

ミラーレンズならではの独特のリングボケが魅力です。さらに最短撮影距離が 1.7m と短く、最大撮影倍率も 1:2.86 倍のマクロ撮影も可能です。野鳥撮影や航空機の撮影のような超望遠を要求される撮影から、自然風景の撮影まで、気軽に持ち運べる超望遠レンズです。

SZ 500mm F8 Reflex MF（マウントは 6 バリエーション）
希望小売価格：64,800 円（税別）

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー

広報・宣伝課 田原栄一

TEL：03-6840-2970

メール：etahara@kenko-tokina.co.jp

https://www.kenko-tokina.co.jp/



グローバルソリューションサービス

グローバルソリューションサービス株式会社（略称 GSS）は、2020 年 10 月 1 日付をもってイストテクニカルサービス株式会社を吸収合併し、「カメラと IT 機器のシナジー」を目指し、グローバルソリューションサービスの一部門としてカメラ修理・カメラメンテナンスなどの技術サービスをご提供しております。

国内の主要カメラメーカーの修理認定により、カメラ修理はもちろんの事、メーカー間の垣根を超えた修理サービスをご提供しております。

正規認定契約メーカーとして各社の認定をもらっています。Canon、Nikon、OM SYSTEM、PENTAX、RICOH、Panasonic、SIGMA、TAMRON、Profoto。

また、グローバルソリューションサービスは、国内・海外の IT 機器メーカーの認定により、パソコンやタブレット、スマートフォン、など様々な機器を修理するマルチベンダー修理を提供し、Apple 正規サービスプロバイダ、Microsoft パートナーとして、お客様へ安心なサポートをご提供しております。

修理サービスで培った品質へのこだわりは、弊社事業の ICT サポートからシステム開発、新電力サービスの幅広い分野で適用し、お客様の要望にお応えします。

【問い合わせ先】

グローバルソリューションサービス株式会社 サポートサービス事業部
イストテクニカルサービス 伊藤一博

TEL：03-5855-7577

メール：itoh@isuto.co.jp

https://www.gssltd.co.jp



（構成／出版広報委員・川上卓也）

「賛助会員トピックス」頁への 寄稿ご案内

賛助会員の皆様には、会報に「賛助会員のページ」を設け、トピックスやお知らせなどの記事を掲載しています。貴社のトピックスやお知らせなどがございましたら、紙面の都合上あまり多くの文字数はとれません。貴社のニュース並びにお知らせなどをご寄稿下さいますようご案内申し上げます。

数々の新規機能を盛り込んだ意欲機

Nikon Z 9 の進化

デジタルカメラの進化に伴い、ミラーレス化が進んでいる。スポーツや動きの速いものにはミラーレスは時期尚早という声もある中、各社上位モデルもミラーレス化が進みソニー・キヤノン・ニコンではミラーレス一眼がメイン機種になってきた。ソニーα1 やキヤノン EOS R3 など機能の進化したモデルが登場し、スポーツの世界でも使われ出してきた中で、ニコンが新機種 Z 9 を発表した。ニコンイメージングジャパン・カスタマーサポート部ゼネラルマネジャーの小笠原武彦さんに開発のねらいについてお話を伺った。

◆ Z 9 の 4 つのコンセプト

Z 9 のコンセプトとしてフラッグシップ機に恥じない機能を最高のレベルで搭載しています。

- ① AF 性能の強化
- ② 自然な見え方のファインダー
- ③ 内部メモリーに 2 時間超えの記録できる動画性能
- ④ 一眼レフの D シリーズ同等以上の堅牢性

この 4 つの機能により信頼性が高いフラッグシップ機となりました。

① 高速 AF 演算が可能になる EXPEED 7 の開発により、AF を強化しました。CMOS からの高速読み出しされたデータを高速演算を実現し、ディープラーニング技術を生かした 9 種類の被写体自動検出に加えて 3D-トラッキングによる粘り強い被写体追尾性能が特徴です。それらを可能にしたのは Z マウントシステムの高速通信が貢献しています。



② 自然な見え方のファインダーは、従来の電子ビューファインダーでは見られなかった瞬間を見ることの出来る Real-Live Viewfinder を搭載。従来のブラックアウトフリーと違い、シャッターを押している間も止まることなくリアルな映像を表示させました。ファインダーの光学性能も相まって滑らかな動きで見やすいファインダー映像を提供できました。滑らかな映像は秒間 120 コマ撮影できるフレームキャプチャ+を実現しました。

③ 動画性能も強化されて、内部メモリーに 2 時間を超えて記録出来る実用的な 8KUHD/30p 動画に対応し、4K UHD/120p のハイレームレートでも 125 分までの内部メディア記録に対応しています。動画の内部メディア記録は、H.265 (HEVC)、ProRes 422 HQ から選択

可能です。

④ 一眼レフ D シリーズ同等以上の堅牢性においては、現行のフラッグシップ機 D6 同様にマグネシウム合金ボディの採用により防塵・防滴性能を強化して信頼性を得てもらえるようにしました。背面液晶も縦横 4 軸チルト式モニターを採用することにより、アングルの自由度を提供しています。特に縦位置撮影時のローアングルやハイアングル時に要望の大きかった機能でありました。Z 9 ではバリアングル液晶ではなく縦横 4 軸チルト式を利用したのは、耐久性を考えての採用となります。



小笠原武彦氏と Z 9

シャッターユニットを無くすことによりメカシャッターの耐久性を考える必要がなく、機械的に動作する部分がなくなることによりシャッターユニットからの摩耗によるゴミも出ません。ボディ自体も D6 から比べて約 20% 小型化に成功しました。

◆ Z 9 ならではの機能

ミラーレス化に伴い Z シリーズからカメラ内手ブレ補正にも対応している手ブレ補正機能が進化。5 軸補正のボディ内センサーシフト方式 VR と、手ブレ補正 (VR) 機構内蔵レンズとの組み合わせでは (シンクロ VR)、最大 6.0 段の補正効果に進化しました。また、シャッターユニットを無くすことにより、シャッターのメンテナンスもなくなり故障部分が減りより信頼性を増しました。

今までは、シャッターが撮像センサーへの露光を制御していましたが、センサー自身の露光制御機能が進化することにより、シャッターユニットを無くすことができました。これが電子シャッターで、よく言われるローリングシャッター現象は、センサーの露光開始か

ら終了までに時間差があることによる像のゆがみのことです。Z 9にはニコン独自の積層型 CMOS センサーによる高速読み出しと画像処理エンジン EXPEED 7による高速処理により高速連写を実現しています。また、非圧縮 RAW と同レベルの高画質を維持したまま、約 1/3 のファイルサイズ高効率 RAW を採用し、メディアへの記録やパソコンでの編集作業の高速化を図っています。(高効率 RAW には intoPIX 社の技術を採用しています)

ミラーレス一眼では、レンズ交換時にセンサーがむき出しになるため、一部のカメラではシャッターを閉じる機能を搭載したものがありませんでした。しかし、Z 9では電源 OFF でセンサーをカバーしてくれるセンサーシールド機能を取り入れました。これによりレンズ交換の自由度が大幅に進んだと思います。



センサーシールド機能によりゴミの付着の軽減ができる

電子シャッターによりシャッターを無音で撮影できることは、聴覚障害者競技のような音を出せない撮影時やコンサートや発表会など演奏に影響があるときに必要なことです。逆にポートレートなど被写体にいつシャッターを切っているのかを知らせる上で電子音の疑似的なシャッター音を設定できる機能も取り入れました。撮影者自身もシャッター音があるほうがリズムよく撮影できるという意見もあり、音量最小にすれば自分にだけ聞こえる程度の音量で撮影できるなど音量に幅を持たせました。

実際に筆者が触ってみたが、30cm 離れれば全く聞こえない音量設定もありました。音量だけではなく AF の食いつき具合やファインダーの見え方など申し分なく、ブラックアウトフリーで Z 9 でしか撮れない世界があるのを感じました。

◆フラッグシップ機の必須要件

報道の世界では、100m 走のゴール横からの撮影などカメラマンが入れない場面での活躍もニコンでは、長年の経験からリモート撮影システムなどで今まで撮れなかったシーンへの展開も強化しています。

今後、大きなスポーツイベントにおいては、Z 9 による撮影で、今まで見られなかった写真が見られるようになると確信しています。速報性など必要な報道の世界では、RAW データ撮影よりも撮ったまま使える JPEG が多用されています。JPEG 画像への信頼性も

大事なことで認識しています。ハイスピードフレームキャプチャ+使用時の撮影速度は最大撮影枚数は約 120 コマ/秒となり、目では追いきれない世界が撮影できるようになりました。特に 1 秒間に 120 コマのブラックアウトがあるとファインダーを見ていると真つ暗な状態だといえます。その間もブラックアウトなしで被写体を追いかけることができます。

また、フラッグシップ機としてどこに設定ボタンがあり素早く設定が出来るかどうか大事なことであり、Z 9 は欲しい機能を各ボタンに割り当てられる機能を豊富に用意しました。信頼性と堅牢性を考えて作られているのがフラッグシップを名乗れる上で一番大切なことであるとニコンは考えています。

◆今後のフラッグシップ機のあり方

今後開発していくフラッグシップ機は、軸足をミラーレス機に置いて開発していくことになります。ニコンはミラーレス機の発売に出遅れた感があると思いますが、今後 Z 9 を進化させていきます。今までフラッグシップといえば画素数は控えめで、ノイズ耐性や即写性に重きを置いていましたが、ミラーレス化により動画性能も加わり 8K (約 3300 万画素) からの静止画切り出しなどでも十分に画素数は足ります。電子シャッターにより 1/32000 秒というシャッター速度も実現できました。動きを止めるときには必要なシャッター速度であり、晴天下において明るいレンズを開放近辺で使いたいときなどに ND フィルターを使わなくても可能になりました。

また、撮影状況によりカメラ設定も変えなくてはなりません。機能が增えるので、操作性は今までと同じというわけにはいきませんが、今までのメ

ニューを一気に変え 必要な機能への素早いアクセスも大事でしようのではなくアクセスしやすいように改良しています。もちろん普段頻繁に使う設定は、カスタムボタンに登録できるのは必須条件だと考えます。

今後の展開として、ファームアップによる対応機能も発表しています。ファームアップ領域を大きくとり、今後のフィードバックによるバージョンアップや機能の強化もしっかり考えています。

(協力/(株)ニコン、吉澤士郎、
記・撮影/出版広報委員・川上卓也)



お話を伺った小笠原武彦氏



2021 年度「報道写真論」講座報告

主催：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

2011 年度から始まった専修大学「ジャーナリズム学科（旧：人文・ジャーナリズム学科、担当：専修大学教授・山田健太）」の「報道写真論」の講義に、2021 年度は渋谷敦志と小澤太一の両氏に講師をお願いした。

専修大学のジャーナリズム学科開設趣旨は「学生たちの真実を見抜く目を育て、批評力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者に実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で、何が起きているかを理解してもらうことを」方針としている。この講座には 2011 年度・桑原史成、2012 年度・長倉洋海、英伸三両氏、2013 年度・宮嶋茂樹、樋口健二両氏、2014 年度・大石芳野、山本皓一両氏、2015 年度・清水哲朗、石川文洋両氏、2016 年度・桃井和馬、石川梵両氏、2017 年度・宇井真紀子、広河隆一両氏、2018 年度・公文健太郎、竹沢うるま両氏、2019 年度・小松健一、前川貴行の各氏を派遣。2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止、延期となった。会場は、川崎市多摩区の専修大学生田キャンパス。

●渋谷 敦志

2021 年 5 月 4 日～5 月 25 日(6 回)

「まん延防止措置」が適用される中、大学側からオンライン形式にしてほしいとの要望もあったが、こちらの無理を聞いてもらい、対面形式にこだわった。

200 人以上収容する大教室で約 100 人を相手に、座席や換気など細心の注意を払ってスタートした。本講義が入学してから初の対面での講義だったという学生もかなりいて、コロナ禍が学生生活のありようを一変させている事実に驚いた。だから余計に、PC やスマホの画面越しではなく、教室という場を共有することでしか伝わらない「熱」を届けたい思いを強くした。

場の共有はまた、カメラを持って居心地のいい場所から飛び出し、異質な他者との生身の触れ合いを可視化する写真行為において欠かせない営為であるという、ぼくかなりのメッセージでもあった。

毎回繰り返し言及したのは、「写真はビジュアル・ランゲージを使ったコミュニケーション」ということだ。一般的に写真は「見るもの」だが、じつは「読むもの」でもある。学生は書き言葉ではない「ビジュアル・ランゲージ」をすでに日常的に使ってはいるが、ちゃんと学んだ経験はない。写真も

言葉である以上、言語の習得同様、読み書きの能力：リテラシーを身につける必要があるとした。その練習として、毎回百の作品からなるコンタクトシートをプリントして配り、任意の一枚について、「いつ」「どこ」「だれ」「どんな状況」「どんな気持ち」



キャンパスで講義中の渋谷敦志氏



東京都写真美術館「世界報道写真展」を鑑賞する学生達と

「選んだ理由」「読みとったこと」などをリアクションペーパーに書いて提出してもらった。文字量は回を追うごとに増え、後半には裏面までぎっしりと思いをぶつけるように記述する学生も多かった。このリアクションにさらにリアクトを重ねるように次週の講義を組み立て、進めていった。

講義で触れた内容は地域も時代も飛び越えた。ブラジル、エチオピア、アンゴラ、カンボジア、タイ・ミャンマー国境、震災後の福島、コロナ病棟……。コロナ以前からあった分断や排除を乗り越えるにはどうすればいいのか、という解なき問いを毎回、学生に突きつけた。コアテーマは「境界」だ。本来、曖昧であるはずの境界

渋谷 敦志(しぶや・あつし)

1975 年大阪府生まれ。1996 年、大学を休学して一年間ブラジル・サンパウロの法律事務所働く。卒業後、野宿者の実状を取材したルポで国境なき医師団日本主催 1999 年 MSF フォトジャーナリスト賞を受賞。それをきっかけにアフリカやアジアでの取材を始める。現在は世界中の紛争や貧困、難民の問題を写真と言葉で伝えている。JPS 展金賞、視点賞など受賞。著書・写真集に『今日という日を摘み取れ』『まなざしが会おう場所へー越境する写真家として生きる』『回帰するブラジル』『希望のダンスーエイズで親をなくしたウガンダの子どもたち』など。

は、人と人を分断するものではなく、異なる世界を横断し、他者と交わるための領域であること、また境界の問題は各々の内面の問題でもあり、他者を理解するには内なる境界を乗り越える方法を見つけなくてはならないこと、などについて考えてもらった。

先が見えず閉塞感に覆われている今こそ、大量の情報に振り回されず、現場に赴き、自分の目で見て、自分の頭で考えることの大切さを力説しながら、一人でもいいのでこの中から写真家を志す若者が出現してほしいと願い、その一人に語りかけるような講義を心がけた。

●小澤 太一

2021年6月1日～7月13日(7回)

今回の講義期間中も新型コロナウイルス感染症「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」が発出されており、対面かオンラインかを選べたが、講師側の＜対面での授業スタイル希望＞を大学側も聞き入れていただき、100人を超える学生の顔を直接見ながら授業ができた。

全7回の授業のカリキュラムは以下のように組み立てた。

- 1：初めての写真展まで
- 2：テーマの見つけ方
- 3：写真展＆写真集のこと
- 4：旅とトラブル
- 5：身近な被写体
- 6：SNSやブログなど、いろいろなメディア
- 7：今やっていること、これからやりたいこと

写真を学んでいる学生ではなく、ジャーナリスト学科の学生に対して写真家が話すべきことは……を悩みながら、授業の資料を作っていた。広く一般的な内容よりは、なるべく個人の体験したことやその時々のエピソード、思ったことを中心としてまとめることにした。また、あまり『写真』という枠組みだけに固執せず、そして自分が学生だったら何を聞きたいだろう、という多角的な視点を織り交ぜながら、常に一人称の目線を大事にしながらの授業スタイルを心がけた。

コロナ禍での授業だが、それでも対面ならではのリアルを大事にしたかったのと、一方的な壇上からの授業よりは講師＆学生の相互のやりとりができれば望ましいと思っていたので、次の2点のことを試みた。



キャンパスで講義中の小澤太一氏



・授業中の質問や意見があったら、学生がスマホを通してすぐに問いかけられるアプリを使用した。授業の最後にまとめて質問に答えたりすることで、学生にとってもすぐに返事をもらえるスピード感、気軽さが良かったと思う。対面＆スマホ使用のハイブリッドスタイルの新しい可能性を実感した。

・毎回の授業が終わった後に、その時のお題に対してのリアクションペーパーを提出してもらった。A5サイズほどの紙にぎっしりと書かれた感想を読むだけで、こうして授業をやって良かったなど強く実感することができた。

そして講義だけでなく、大きな課題の一つ出すことにした。ジャーナリスト学科ということで…＜『写真』と『文章』で言いたいこと(＊写真は3枚以上、テキストは400W以上)＞というお題で出してみた。事前の授業の中でどうやってテーマを見つけるかのヒントや実体験を話したり、さまざまな写真の使い方の実例を見せてあったが、それ以上に多種多様な課題が集まりった。残念ながらほとんどの学生はスマホでの写真撮影であったが、それでも写真と文章、学生それぞれのユニークな視点が組み合わせることで、読み応えがある大変面白い課題となった。最後の授業の時にはその中のいくつかを発表しながら、僕の感想も言わせていただいた。

コロナ禍という今までとまるで違う環境の中、学生への授業を通して学ぶところがとても多かった2ヵ月となった。大学側でさまざまなサポートをしていただいた山田先生、福富先生に感謝申し上げる。

(写真提供／専修大学、構成／小池良幸常務理事)

小澤 太一(こざわ・たいち)

1975年名古屋生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、河野英喜氏のアシスタントを経て独立。雑誌や広告を中心に、子どもからアーティストや女優まで、幅広く人物撮影するのが活動のメイン。写真雑誌での執筆や撮影会の講師・講演など、活動の範囲は多岐に渡る。ライフワークは「世界中の子どもたちの撮影」で、年に数回は海外まで撮影旅行に出かけ、写真展も多数開催。身長156cm 体重39kgの小さな写真家である。キヤノン EOS 学園東京校講師、公益社団法人 日本写真家協会 会員。主な写真集に『ナウル日和』『SAHARA』など。オフィシャルサイト <https://www.kozawataichi.com>

JPS ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2021・7月～2022・1月)

- ①発行所 ②発行年月
③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数
④定価 ⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア



フクシマ原発棄民 歴史の証人
—終わりなき原発事故—

樋口健二

- ①八月書館 ②2021年8月
③18.8×13cm、368頁
④2,000円 ⑤樋口氏



あの日ジョブズは

片山恭一、写真・小平尚典

- ①ワック ②2021年8月
③18.8×12.8cm、254頁
④1,500円 ⑤発行所



MASSOUD

長倉洋海

- ①長倉商店塾 ②2021年
③27.7×28.7cm、216頁
④15,000円 ⑤長倉氏



駅舎のある風景
～人と時が描く鉄道物語～

越 信行

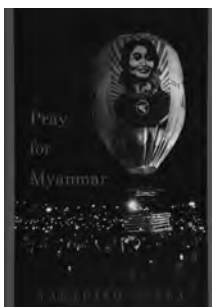
- ①旅行読売出版社 ②2021年6月
③21×15cm、120頁 ④1,300円
⑤越氏



国鉄旅客列車の記録
【客車列車編】

諸河 久、寺本光照

- ①フォト・パブリッシング
②2021年9月 ③25.7×18.3cm、
176頁 ④2,400円 ⑤諸河氏



Pray for Myanmar

三田崇博

- ①日本電子書籍技術普及協会
②2021年4月 ③29.7×21cm、90頁
④3,520円 ⑤三田氏



国鉄 東京駅

荒川好夫/RGG

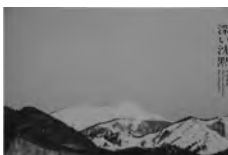
- ①グラフィック社 ②2021年7月
③28×21cm、192頁 ④3,200円
⑤荒川氏



巡歴の道 オキナワ

鷺尾倫夫

- ①JCH フォトサロン
②2021年5月 ③24×25cm、31頁
④1,000円 ⑤発行所



深い沈黙

小林紀晴

- ①ふげん社 ②2021年7月
③23.7×35.5cm、56頁
④3,800円 ⑤小林氏



国鉄旅客列車の記録
【電車・気動車列車編】

諸河 久、寺本光照

- ①フォト・パブリッシング
②2021年9月 ③25.7×18.3cm、
176頁 ④2,400円 ⑤諸河氏



臨界の黙示

桜井 秀

- ①JCH フォトサロン ②2021年9月
③24×25cm、31頁 ④1,000円
⑤発行所



見るだけで癒される
愛らしすぎる犬図鑑

写真・福田豊文、監修・今泉忠明

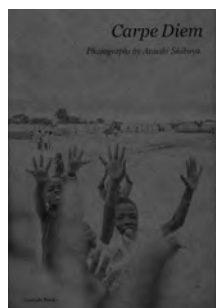
①大和書房 ②2021年9月
③15×10.5cm、255頁 ④900円
⑤福田氏



行っておきたい
関西・幕末維新の史跡50選

文・木村幸比古、写真・三村博史

①淡交社 ②2021年10月
③21×15cm、128頁 ④1,800円
⑤三村氏



今日という日を摘み取れ

渋谷敦志

①サウダージ・ボックス
②2020年11月 ③21×14.8cm、320頁
④2,800円 ⑤渋谷氏



黄金の宝島 佐渡
1977-2021

上山益男

①(有)上山スタジオ
②2021年11月 ③21×29.7cm、128頁
④4,500円 ⑤上山氏



STONE
庵治石と生きる匠たち
吉村和敏

①フォトセレクトブックス
②2021年10月 ③21.7×30.3cm、
135頁 ④7,200円 ⑤吉村氏



カムイの島
宇苗 満

①2021『カムイの島』制作委員会
②2021年10月 ③29.7×21cm、
64頁 ④3,000円 ⑤宇苗氏



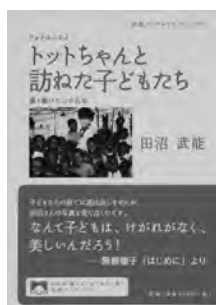
少年線
山崎友也

①日本写真企画 ②2021年8月
③20×22.5cm、96頁 ④2,300円
⑤山崎氏



ステキに魅せる写真ワザ
今井しのぶ

①エムディエヌコーポレーション
②2021年12月 ③21×14.8cm、
160頁 ④1,650円 ⑤今井氏



トットちゃんと
訪ねた子どもたち
田沼武能

①岩波書店 ②2021年10月
③21×14.8cm、80頁 ④880円
⑤田沼氏



それぞれの武蔵野Ⅵ
田沼武能、他7名

①むさしの写真の会
②2021年10月 ③25×25cm、23頁
④-円 ⑤田沼氏



APATANI STYLE
榎並悦子

①光村推古書院 ②2021年10月
③28.8×21.7cm、216頁
④4,000円 ⑤榎並氏



東京地蔵めぐり
蓮野日出男

①蓮野日出男 ②2021年11月
③18×18cm、50頁 ④-円
⑤蓮野氏



竹内敏信 風景写真 名作誕生秘話
一弟子たちが語る竹内流撮影の現場—
監修・竹内敏信記念財団
(会員7名、他6名)

①アイ・イメージング・フラッグ
②2021年12月 ③20.5×23.3cm、96頁
④2,200円 ⑤竹内敏信記念財団



モノクロームの
私鉄電気機関車
諸河 久、西尾恵介

①イカロス出版 ②2022年1月
③28.5×21cm、154頁
④2,300円 ⑤発行所



息の緒
宇井真紀子

①UI出版 ②2021年6月
③21.8×17.3cm、80頁 ④—円
⑤宇井氏



魅せる星空撮影術
田中達也

①インプレス ②2021年12月
③25.7×18.3cm、152頁
④2,000円 ⑤田中氏



長江 六千三百公里をゆく
竹田武史

①冬青社 ②2021年12月
③26.2×23.3cm、160頁
④4,500円 ⑤竹田氏



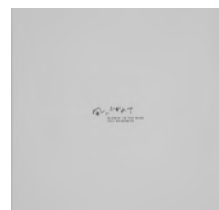
熊野 自然崇拝の聖地
平 寿夫

①平 寿夫 ②2021年9月
③26.8×37cm、56頁 ④—円
⑤平氏



伝え守る
アイヌ三世代の物語
宇井真紀子

①少年写真新聞社 ②2021年12月
③26.5×21.5cm、41頁 ④1,800円
⑤宇井氏



風にふかれて
四宮佑次

①四宮佑次 ②2021年10月
③25.2×26cm、96頁 ④5,000円
⑤四宮氏

寄 贈 図 書

トム岸田様……………The Craft of the Japanese Sword、靖國刀匠
……………(英文版)現代刀の旗手たち、現代に伝わる日本刀の心と技〜図録編〜
深井邦子様……………深井昌司・金堂再建
アフロ様……………東京オリンピック日本代表選手団
日本オリンピック委員会 公式写真集2020
塚田マサ子様……………追慕 刻をつなぐ
村上光明様……………編集・鹿児島県写真協会・鹿児島県写真協会
創立45周年記念写真集
小松健一様……………山崎政幸・記憶の島—故郷・高島
船尾 修様……………石が囁く 国東半島に秘められた日本人の祈りの古層
千代田路子様……………五百羅漢修復 祈りの継承
双葉社様……………監修・櫻井寛、作画・はやせ淳・新・駅弁ひとり旅3
JCII フォトサロン様……………野水正朝・淡国写真帖、伊奈英次・天皇陵
……………国際観光写真にみる1930年代、清岡惣一・自然の旋律Ⅱ

りばん舎様……………S.Kawanago・2020 TOKYO 春夏秋冬
……………永山直樹・旅立ちました 旧沖縄少年院の日々
東京都写真美術館様……………山城知佳子・リフレーミング
……………宮崎 学・イマドキの野生動物、松江泰治・マキエタ CC
……………リバーシブルな未来 日本・オーストラリアの現代写真
……………記憶は地に込み、風を越え 日本の新進作家 vol.18
……………東京都写真美術館 写真映像文化振興支援協議会
……………支援会費購入作品集
日本旅行写真家協会様
……………日本旅行写真家協会 30周年記念写真展 FIND JAPAN
日本写真協会様……………日本写真年報2021
日本写真作家協会様……………2021-2022「JPA 作品集」
二科会写真部様……………第68回展二科会写真部作品集
……………第69回展二科会写真部作品集
写真文化首都「写真の町」北海道東川町様
……………撮影・大塚友記憲・ヌプリコロカムイノミ
JAGDA 様……………JAGDA 国際学生ポスターアワード2021 図録

セミナー研究会レポート

◆2021 JPS フォトフォーラム オンライン報告◆

「あなたが撮らずに誰が撮る」

～名取賞受賞者、ドキュメンタリーフォトを語る～

2021年12月17日配信開始

講師：清水哲朗、高橋智史、鳥飼祥恵

「名取洋之助写真賞」を受賞した、清水哲朗氏、高橋智史氏、鳥飼祥恵氏が出演したYouTube動画を公開した。前編と後編に分けてそれぞれが30分程度の動画となる。写真家になったきっかけや名取賞へ応募した動機、作品の解説、そして現在の活動についてのトークショーが展開されている。

前編では、名取賞をはじめ昨年まで多くの写真賞を受賞した高橋氏がドキュメンタリーフォトと自身の関わりを熱く語る場面から始まり、続いて清水氏の第1回受賞作品「路上少年」の撮影秘話と取材方法、機材選択の工夫、取材対象に対する思いを知ることができる。

後編では高橋氏が第10回受賞作品「屈せざる女性たち・カンボジア変革の願い」の作品を解説し、学生時代からのカンボジアとの関りを丁寧に語っている。続いて鳥飼氏が第11回受賞作品「amputee boy—けんちゃん—」の作品解説と撮影者自らの気持ちを語る。次に、ある家族に深く寄り添いながら取材した作品と昨年開催された東京2020パラリンピック競技大会で撮影された作品の紹介と取材方法などを披露している。

名取賞受賞者が自身の作品を深く語ることは、これから名取賞に挑戦する方の参考となることはもちろん、私たち写真家にとっても意義深い内容だ。



なお、今回の動画制作には下記の各社のご協賛があった。エプソン販売株式会社、株式会社シグマ、株式会社タムロン、株式会社ニコニイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ株式会社。また収録場所と照明機材提供は株式会社ケンコー・トキナー、撮影機材提供をパナソニック株式会社にご協力をいただいた（敬称略）。各社には感謝申し上げます。そして動画の完成まで企画委員スタッフが多くの時間を割いて実現できた。

（記・撮影／川村容一理事）

YouTubeは「2021JPS フォトフォーラム」で検索。

前編は https://youtu.be/058vwa5_NX0

後編は https://youtu.be/NB52Nn2_HMU

◆国際交流委員会ウェブサイト企画◆

「表現者たち」

新型コロナウイルスの感染拡大で、シンポジウムや講演会などの形態の企画開催が難しくなった。そこで従来のイベントに代えてウェブサイト上で、国際的な関心や共感を呼ぶテーマに取り組む写真家とその作品を紹介している。JPS ホームページの「イベント・セミナー」からご覧いただけます。

Vol.7

「被写体」を越えた何かを求めて

～心に焼き付く光景は個にある

林 典子 (Noriko Hayashi)

企画・構成：秋山哲也、協力：石井真弓、中村恵美

林さんの代表作は、ジェンダーや社会と個人の記憶に焦点をあてた、長期的な密着取材を進める中で、その多くが生まれています。

時間をかけて情報を集め、現場では取材される側との関係を深めながらストーリーを構築し記録。写真集や月刊誌、著作本等で発表されています。



夫をISの戦闘員に殺害された19歳のズィーナ。ピワ（クルド語で「家がない」という意味）と名付けた子供に母乳を与える

©2015 林 典子

20世紀以降

の戦争やテロ、内紛などによる心の傷は、21世紀に入っても簡単には癒えません。個の人々の声や表情を足で拾い集め記録、写真と文で発表してきた林さんのドキュメンタリー作品は、個の人格の貴重な痕跡として過去と今をつないで、我々の心に迫ってきます。

【プロフィール はやし・のりこ】

1983年、神奈川県生まれ。イギリスのPhoto Agency「Panos Pictures」所属。国際紛争学・平和構築学を専攻していた大学時代にガンビア共和国の地元新聞社で写真を撮りはじめる。卒業後は、フリーランスの写真家として国内外で活動。第7回「名取洋之助写真賞」、仏「ビザ・プール・リマージュ」金賞、全米報道写真家協会賞1位など受賞。著書に『キルギスの誘拐結婚』（日経ナショナル ジオグラフィック社）、『ヤズディの祈り』（赤塔舎）、『フォト・ドキュメンタリー 朝鮮に渡った「日本人妻」60年の記憶』（岩波新書）など。英GRANTA誌、ニューヨークタイムズ紙、独Stern誌、英ガーディアン誌、National Geographic誌などに写真や記事を寄稿。





藤本 俊一 名誉会員

2021年10月23日、誤嚥性肺炎のため逝去。87歳。

1966年入会、1978年から8期18年にわたって理事を務め、総会の議長を7度担当されました。また、関西地区の組織編成や活動での基礎を築くなど協会の運営に多大な貢献をなされました。こうした功績により2018年に名誉会員に推挙されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1934年山口県に生まれる。大阪経済大学経済学部卒業、藤本フォトプロダクションを設立し、松下電器、松下電工等の企業の撮影に携わる。

訃報 藤本俊一名誉会員

永野 一晃

10月25日の夜、JPSに入会時から何かとお世話になっていた藤本俊一さんの訃報を、福永一興さんからの電話でお知らせ頂きました。すでに家族葬でお見送りを済まされたとのことでした。いただいた電話は1時間以上にわたり、次から次へといろいろな思い出話を二人で故人を偲びました。

私が入会してすぐにJPS関西在住会員で天橋立一泊旅行がありました。大先輩から新入会員まで、写真談義に花を咲かせ、夜の更けるのを忘れ大いに飲みましたが、早朝には全員で天橋立を散策しながらの撮影会、先輩方の姿を見て頑張らなければと思ったものでした。このような会員の親睦は何時も藤本さんが中心で、会議の時も事務所をお借りしていました。また、遠方より来られた会員の方を自宅に泊めておられたことも度々でした。

数年後に私がJPS展の関西展に関わった折りに

は、関西展の後援を今までの新聞社1社より公的団体に変更し報道各社にも幅広く報道していただけるようお願いしたところ、藤本さんと当時の熊切副会長にご尽力いただいたことでスムーズに事が運び後援団体を変えることができ、今日まで続いています。これも藤本さんのおかげでした。

藤本さんは東京での理事会を一度も欠席したことがないと話しておられました。お酒は飲まれないのに関西での宴席にもよく顔を見せてくださり、藤本さんの最後の一本締めでお開きとなっていました。

趣味では、オーディオでいろいろな音源をCD-ROMにまとめておられて、お会いするとそっと手渡ししてくださいました。

この2年程はコロナ禍の自粛でお会いする機会がなかったことが残念でなりません。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

合掌



小林 雅裕 正会員

2021年8月6日、肺がんのため逝去。69歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1983年入会)



小原 晴雄 正会員

2021年9月3日、敗血症のため逝去。72歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1996年入会)



枝川 一巳 正会員

2021年8月14日、胃がんのため逝去。85歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1965年入会)



小原 玲 正会員

2021年11月17日、肺がんのため逝去。60歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(2018年入会)



山口 直 正会員

2021年10月10日、心不全のため逝去。84歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1965年入会)



堀切 保郎 正会員

2021年12月10日、心不全のため逝去。73歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(2007年入会)



夏目 安男 正会員

2021年12月23日、肺炎のため逝去。
71歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(2017年入会)



古川 剛尚 正会員

2022年1月8日、肺炎のため逝去。
82歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(1971年入会)

経過報告 (2021年5月～12月)

◎5月28日 2021(令和3)年度第22回定時総会

PM2:00～4:00 JCIILビル6F会議室 本人出席28名、代理委任4名、議決権行使書913名、計945名、外部理事6名(リモート参加含)、監事2名
◎決議事項:第1号議案:2020(令和2)年度事業報告及び決算承認の件、第2号議案:「公益社団法人日本写真家協会定款」一部変更及び一部追加の件、第3号議案:理事及び監事の任期満了に伴う改選の件、第4号議案:名誉会員並びに名誉会長推挙承認の件

◎報告事項:1.「2021(令和3)年度事業計画書」の件、2.「2021(令和3)年度予算書」の件、3.第47回「日本写真家協会賞」の件、4.会費滞納による正会員資格の喪失の件、5.その他

◎5月28日 第52回公益社団法人日本写真家協会理事会 PM3:10～3:30 JCIILビル6F会議室 19名、欠席1名、監事3名(リモート参加含)

◎2021(令和3)年度代表理事及び業務執行理事の選定の件、他

◎6月1日～6日 第45回2020・第46回2021JPS展(東京)
東京都写真美術館B1F 入場数1,530名

◎6月22日～27日 第45回2020・第46回2021JPS展(関西)
京都市美術館別館1F・2F 入場数1,107名

◎6月25日～ 第1回技術研究会 JPSYouTube

◎写真家のための写真集制作・出版の新しいスタイルを知る

◎7月12日 「写真学習プログラム」機材協力説明会 PM1:30～3:30 JCIIL会議室 参加数7社8名(リモート参加含)

◎7月15日～21日 2021年新入会員展(東京) アイデムフォトギャラリー「シリウス」出品者17名、作品数51点、入場数421名 ◎「私の仕事」

◎7月27日～8月1日 第45回2020・第46回2021JPS展(名古屋) 愛知県美術館 ギャラリーG・H・1室 入場数1,135名

◎8月27日 「笹本恒子写真賞」選考会 PM2:00～5:00 JCIIL会議室6名 ◎選考・佐伯剛、前川貴行、野町和嘉、推薦候補者・11名、第4回「笹本恒子写真賞」・渋谷敦志

◎8月27日～9月2日 2021年新入会員展(大阪) 富士フィルムフォトサロン大阪 出品者17名、作品数51点、入場数2,528名 ◎「私の仕事」

◎9月2日 2021年第16回名取洋之助写真賞作品選考会 PM1:30～4:00 JCIIL会議室 18名 ◎選考・山田健太、清水哲朗、野町和嘉、応募者・26名26点、名取洋之助写真賞・川嶋久人「失われたウイグル」、奨励賞・喜屋武真之介「母と子」

◎9月29日 日本写真保存センター2021年度第2回諮問委員会議

PM2:00～3:30 JCIIL会議室 17名(リモート参加含)

◎9月29日 日本写真保存センター2021年度第2回支援組織会議

PM4:00～5:00 JCIIL会議室 支援組織会員5社1団体7名、JPS8名(リモート参加含)

◎11月4日～ 国際交流委員会企画「表現者たち」Vol.7 JPSホームページ ◎「被写体」を越えた何かを求めて心に焼き付く光景は個にある 林典子

◎11月7日 おやこ写真教室 AM10:00～17:00 清里フォトアートミュージアム 参加数8組16名

◎11月16日 出版広報座談会 PM2:00～4:00 アクセア会議室US半蔵門ビル 14名

◎12月8日 第47回日本写真家協会賞贈呈式 PM2:00～2:15 JCIILビル6F会議室 ◎受賞者・株式会社日本写真企画

◎12月8日 第16回名取洋之助写真賞授賞式 PM2:15～2:40 JCIILビル6F会議室 ◎受賞者・川嶋久人、喜屋武真之介(奨励賞)

◎12月8日 第4回笹本恒子写真賞授賞式 PM2:40～3:00 JCIILビル6F会議室 ◎受賞者・渋谷敦志

◎12月8日 名誉会員顕彰式 PM3:00～3:15 JCIILビル6F会議室

◎顕彰者・田沼武能、松本徳彦、水越武

◎12月8日 賛助会員との懇談会 PM3:30～5:00 JCIILビル6F会議室 賛助会員16社24名、JPS37名(リモート参加含)、関係者5名

◎12月16日～22日 第4回「笹本恒子写真賞」受賞記念展

アイデムフォトギャラリー「シリウス」入場数518名

◎渋谷敦志写真展「今日」という日を取りぬく

◎12月17日～ 2021 JPSフォトフォーラム オンライン(第15回)

JPSYouTube ◎「あなたが撮らずに誰が撮る」～名取賞受賞者、ドキュメンタリーフォトを語る～ 清水哲朗、高橋智史、鳥飼祥恵

編集後記

◎コロナ禍で暮らしに変化を強いられて丸2年、リモートワークや移動の自粛、働き方から日常生活まで今までと違った価値観での生活に慣らされてしまった。はたしてコロナが治まれば元の生活に戻るのか?と考えると、そうはならないと簡単に想像がつく。コロナ禍がもたらした生活様式の変化が日本の将来に凶と出るか、吉と出るか、じっくり見極めて行きたい。(小池)

◎遅ればせながら、オリンピックの特集を組みました。前回のリオからの5年間で、スポーツを写すカメラが大幅に変わりました。そう、一眼レフからミラーレスへです。東京2020オリンピックはカメラ史上、エポックメイキングなオリンピックになりました。新型コロナウイルス禍がなかったら、そうはなかったかも。歴史の悪戯? (伏見)

◎この号では「東京2020」関連の記事2本の取材を担当させて頂きました。大会期間中に撮影されたカット数は、一人あたり何万カットにも及んだのだとか。これが現代という時代なのでしょう。ついこの前まで、ボジを切り出してマウントを貼る作業をしていた記憶があるのですが。(池口)

◎コロナ禍で延期だった日本建築写真家協会写真展を昨年11月ようやく開催できました。来場者からは「銀座務めだが、じっくりと銀座通りを見た事がなかった」など、それぞれの「銀座パノラマ」を味わって頂けた様でした。銀座通連合会ははじめ、ご協力皆様にお礼申し上げます。(小野)

◎2年ぶりに「名取賞」受賞作品写真展が開催され受賞者のお二人に話を伺った。私より一世代若い写真家たちの登壇に、「俺もまだ負けないゾ!」というのが年配者の私の正しい反応なのだろうが、「写真は勝負ではない、いかに自分の写真表現をするかだ」とここでは言うておこう。(飯塚)

◎Tokyo2020が新型コロナの影響で1年延期されて2021年に行われた。オリンピック関連の方のお話を皆さんに集まってもらって聞けるという機会はいろいろなメディアにいても聞けるものではない。JPSに入っている役得として聞かせてもらった。そして皆さんは北京へ。(川上)

◎誰だったか「芸能人は命が命」ならぬ「写真家は靴が命」とはよく言ったと思う。サイズはぴったり、走ってもグリップはしっかり。水にも強い方がいい。結果スニーカーに落ち着くけれども、いつも同じだどこかみずばらしい。多少はフォーマルにも履ける靴を探さない。(山縣)

◎この文章を書いている時期は新入会員の申し込みと重なっています。昨年は入会者数が17名で、協会創立から10年が過ぎた1960年以降で最少記録でした。今年はいったい何名の応募があるのでしょうか? 締切日までドキドキものです。(事務局 杉山)

日本写真家協会会報 第177号 (年2回発行) 2022年3月10日 印刷・発行 ©編集・発行人 野町和嘉

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版広報委員 小池良幸(常務理事)、伏見行介(理事)、池口英司(委員長)、小野吉彦(副委員長)、飯塚明夫、川上卓也、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIILビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MKビル 電話 03(3265)0611(代表)

写真解説

Think Different 2003 (表紙写真) ———— 小平尚典

2003年11月27日、東京の銀座アップルストア・オープニング記念セレモニーでスティーブ・ジョブズと12年ぶりに再会した。PowerBook G4を熱心に紹介して、自分の言いたいことを語り終わると、いきなり壇上から降りて消えて行った瞬間がこの写真である。帰り際に僕は「ヘイ、スティーブ」とカメラを向けた。彼は「ノーサンキュー」とクールに立ち去り、それ以降会うことはなかった。米国でIT革命のレジェンドたちをたくさん撮影したが、アーティストと呼べるのは彼だけだった。(写真集『あの日 ジョブズは』写真展「THE THINKERS」)

紫の部屋 (表4写真) ———— 吉住志穂

昨年、目白のTAギャラリーで行った写真展「夢」より。花をモチーフにした写真展でしたが、この作品だけはアリがメインとなっています。ボケている部分はアサガオの花弁で、漏斗状の奥にアリが佇んでいます。現在は花の写真ばかり撮っていますが、写真学校の学生時代のころ、ゼミ講師だった竹内敏信先生に「アリを撮ってみろ」と言われたのをきっかけに、撮り始め、写真展も行いました。小さな命の輝きを前に心を癒される思いです。(写真展「夢」)

◆ JPS ギャラリー

中山イチさん ———— 上山益男

「写真を撮ってくれてありがとう」岩ノリ採り姿の写真を送ってから1か月後、手書きで丁寧な御礼のハガキが届きました。それ以来、佐渡に入る事足かけ44年になりました。日本の縮図といわれて、面積は東京23区、淡路島の約1.4倍の広大な島です。金山・漁師・農民・棚田・景勝地・芸能・朱鷺と暮らす郷・等、今日のありのままの姿、意味ある光景を見たま、あるがままに撮影してまいりました。一枚一枚は断片的ですが写真集に構成すると「写真が文章」の様になり、見て読んでいただければと思います。

表紙写真の中山イチさんは、私の故郷岩手の母方祖母・清水キエおばさんに容姿がソックリと思い出されます。

政府は「佐渡島の金山」を世界文化遺産としてユネスコに推薦することを2022年2月1日に決定しました。

想愛 ———— 井上嘉代子

広島県帝釈峡にある雄橋は高さ40mの巨大な石灰岩が侵食作用で長い年月をかけて貫通した洞門だ。溪流沿いをしばらく歩くと目の前に現れる。帝釈川を渡る横からの姿も魅力的だが、橋の下に潜り込むと鐘乳洞の中の様な冷やかな空気感と迫り来る岩が圧巻の存在感だ。神の橋とも呼ばれるだけあって、何かを感じる。そんな迫力ある岩を見上げると二つの命を見つけた。まるでお互いを信じて生きているかの様に寄り添っていた。

熊を撃つ猟師 ———— 西野嘉憲

飛騨地方の最奥に位置する「山之村」は、北アルプスに連なる標高1000mの山間集落です。この地はかつて「秘境」と呼ばれ、村人は雪に閉ざされた長い冬を生き抜くため、古くから熊猟を受け継いできました。猟師たちは山のカミに祈り、天候と生態を読み、雪山に熊を追います。獲られた熊は、人々の命と暮らを支える特別な存在として崇められてきました。生と死が日常にあるこの世界には、都市社会で失われた命の存在が今もしっかりと脈打っていると感じます。

金魚暖簾 ———— 水咲奈々

最近の水族館の水槽は、趣向を凝らした様々な演出がされています。金魚は色彩豊かな体なので、そこに光の演出が加わることで、驚くほど艶やかな姿を見せてくれます。その魅力を表現するために、ピントの合った箇所は切れ味良くシャープに、その周辺部は絵の具を水で溶かしたような滑らかなボケで、水中を踊る姿を魅力的に描き出してくれる半世紀前のオールレンズと、最新のミラーレス機を組み合わせ撮影しました。

「APATANI STYLE」より ———— 榎並悦子

インド北東部アルナーチャル・プラデーシュ州に、東ヒマラヤの主要な民族グループの一つであるアパタニ(Apatani)民族が暮らしている。年配女性の鼻栓やタトゥといった外見的特徴や精霊信仰の暮らしでも知られている。アパタニでは太陽と月を崇拝し自然のあらゆるものに神霊が宿ると考える土着の信仰を制度化したりバイバル宗教ドニ・ポロ(Donyi-Polo)が注目を集めている。写真は集会所を訪れた信者。

天地黎明／アシリパ ———— 宇宙 満

平成5(1993)年故郷の奥尻島を襲った北海道南西沖地震をきっかけに写真家を志した私は、平成21(2009)年東京から帰郷したのち「離島独自の環境や自然現象(現実)、カムイが宿る景観(仮想)」をモチーフに、「祈りの原景」をテーマとした作品制作を行っている。

絶海の孤島で写真表現を追求して十年余り。鍋釣岩の空洞から昇る朝日が暗雲を切り裂いた瞬間、アイヌ文化に伝わる「アシリパ(暗い時代が終わり新しい物事が始まろうとする時)」が、鮮やかな光輪となって現れた。

◆ FUJIFILM X ギャラリー

素敵な日常 ———— 浅岡 恵

新型コロナウイルスのパンデミックから約二年、常にマスクを着用し、残念ながら人と人の接触を控えることが当たり前になってしまった。何気ない普通の日が特別であると再認識させられた。同時期を生きて、関わっていることは必然か偶然か、時空の一致の天からの贈り物。パンデミック以前の写真を見ながら訪れた土地の事や友人たちのことを思う。自由に行き来できる日が早く来ることを願いつつ。

Backstreet Breakdance ———— ジェyson ハレコ

渋谷の夜の光をバックにFujiFilmのXF50mm F1.0を使って8-Girl Ayuとの撮影の一枚です。僕はF1.0での撮影ははじめてだったので、F1.0で夜の光はどのように映るかを見るのを楽しみにしていました。渋谷の裏道や歩道橋で撮影しながら、ここの裏道に辿り着きました。左側の壁をバックにして撮ろうと思いましたが、良く見たら後ろの建物の光が綺麗だったので、奥行きとカメラに向かって来る道路の線を使った構図を作って、この写真を撮りました。

Style ———— 中村 翔

12月上旬頃寒さが強まる中、それでも人々の流動は変わらず流れている。街中に消えていくその中の一人に目を奪われた。風が強く吹きコートが靡く、光と影の狭間に揺れていた。今回単焦点レンズXF56mm F1.2Rで撮影したのは、シャープな世界観を捉えたいという点と光影のグラデーションを表現したいと点です。このレンズのシャープな描写力により、その2点とその場の空気感を捉えることができた。

HCLファインアートプリントサービス



ILFORD CERTIFIED PRINTER PARTNER

イルフォード 認定ラボ

作品を極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。

ファインアートプリントの高い技術と知識を有する

熟練のプリンティングディレクターが作品制作をサポートします。



ハーネミュレ ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、高い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、特にモノクロ写真に最適です。



ハーネミュレ フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使える、モノクロとカラー写真のどちらにも適し、深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。



伊勢和紙 芭蕉

滑面と粗面があり、制作意図に応じてどちらの面でもプリントが可能です。違った風合いを表現できます。

〈写真は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

■フォトイメージングセンター

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町2-6-14

☎ (03) 6854-9581

■大阪営業部 営業課

〒530-0028

大阪府大阪市北区万歳町3-17

☎ (06) 6313-2351

ファインアートプリント

サービスの詳細はこちら▶

webからも注文できます！



Canon

make it possible with canon

無双



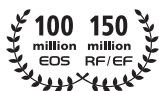
そのカメラに境界はない。すべての世界をひとしく鮮やかに描き出す、異才のフルサイズミラーレス。映像表現の可能性をどこまでも拡張するために静止画と動画の性能を徹底的に突き詰めた。EOSの系譜に新たに刻まれる、その名は、EOS R3。時は待ってくれない。今、その手に。未開の領域が待っている。

映像の新しい時代が走り出す。

NEW

EOS R3

写真は進化する。EOS R SYSTEM



EOSは2019年9月に累計生産台数1億台^{※1}、交換レンズRF/EFレンズシリーズ^{※2}は2021年1月に累計生産本数1億5,000万本を達成しました。

※1 映像制作用シネマカメラを含む。※2 RFレンズ、EFレンズ、EF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2021年2月3日時点。



©キヤノン EOS R3 ホームページ

canon.jp/eos-r3

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

TAMRON

Focus on the Future

28-75mm F/2.8 Di III VXD G2 (Model A063)

ソニー Eマウント用

第2世代、
「G2」へ。



NEW

28-75_{mm} F2.8 G2

for Sony full-frame mirrorless

(Model A063) ソニー Eマウント用 Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

www.tamron.co.jp

製品の詳細情報はこちらから▶



PENTAX



一眼レフの未来を創る。

日本で初めて一眼レフをつくったペンタックス。

その哲学、技術、情熱のすべてを注ぎ込んで、この一台は誕生しました。

APS-Cフラッグシップモデル、PENTAX K-3 Mark III。

写真を撮ろう。

K-3 III

株式会社リコー / リコーイメージング株式会社
お客様相談センター：0570-001313 (ナビダイヤル) www.ricoh-imaging.co.jp

RICOH
imagine. change.

ヨドバシ・ドット・コム 映像制作機材 専門ストア開設しました



プロ機材を豊富に品揃え
ぜひご利用くださいませ



新規会員募集中 日本写真家協会 会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・テビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ

www.yodobashi.com

新宿西口本店 〒160-0023 新宿区西新宿1-11-1 ☎ 03(3346)1010	マルチメディア 新宿東口 〒160-0022 新宿区新宿3-26-7 ☎ 03(3356)1010	マルチメディア Akiba 〒101-0028 千代田区神田花岡町1-1 ☎ 03(5209)1010	マルチメディア 錦糸町 〒130-8580(駅ビルテルミナ1・2・3階) 墨田区江東橋3-14-5 ☎ 03(3632)1010	マルチメディア 上野 〒110-0005 台東区上野4-10-10 ☎ 03(3837)1010
マルチメディア 町田 〒194-0013 町田市原町田1-1-11 ☎ 042(721)1010	八王子店 〒192-0082 八王子市東町7-4 ☎ 042(643)1010	マルチメディア 吉祥寺 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 ☎ 0422(29)1010	マルチメディア さいたま新都心駅前店 〒330-0843 さいたま市大宮区吉敷町4-263-6 ☎ 048(645)1010	マルチメディア 川崎ルフロ 〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-11 ☎ 044(223)1010
アウトレット京急川崎 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町21-12 ☎ 044(221)1010	マルチメディア 横浜 〒220-0004 横浜市西区北幸1-2-7 ☎ 045(313)1010	マルチメディア 京急上大岡 〒233-0002(京急百貨店1・8・9階) 横浜市港南区上大岡西1-6-1 ☎ 045(845)1010	千葉店 〒260-0015 千葉市中央区富士見2-3-1 ☎ 043(224)1010	マルチメディア 新潟駅前店 〒950-0901 新潟市中央区弁天1-2-6 ☎ 025(249)1010
マルチメディア 宇都宮 〒321-0964(トナリエ6・7・8階) 栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6 ☎ 028(616)1010	マルチメディア 甲府 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-3-3 ☎ 055(230)1010	マルチメディア 郡山 〒963-8002 福島県郡山市駅前1-16-7 ☎ 024(931)1010	マルチメディア 仙台 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-2-13 ☎ 022(295)1010	マルチメディア 札幌 〒060-0806 北海道札幌市北区北六条西5-1-22 ☎ 011(707)1010
マルチメディア 名古屋松坂屋店 〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4・5階) 愛知県名古屋市中区栄3-16-1 ☎ 052(265)1010	マルチメディア 梅田 〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町1-1 ☎ 06(4802)1010	マルチメディア 京都 〒600-8216 京都府京都市下京区東堀小路町590-2 ☎ 075(351)1010	マルチメディア 博多 〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12 ☎ 092(471)1010	ヨドバシカメラの インターネットショッピング www.yodobashi.com クータイでいつでもどこでも簡単ショッピング! http://m.yodobashi.com

「おやこ写真教室」開催

2021年11月7日 清里フォトアートミュージアム

教育推進委員会

写真文化の振興事業「小学生の写真学習プログラム」に続いて2020年度より親子で写真を楽しむ「おやこ写真教室」を実施している。2021年度は当初、5月に予定されるJPS展東京展会場の東京都写真美術館で実施を予定していたが、新型コロナ感染拡大による緊急事態宣言が発せられ、年内延期を余儀無くされた。

2021年7月、当協会の賛助会員、清里フォトアートミュージアムの担当者より、「おやこ写真教室」を清里で実施してほしい旨の連絡を受け、教育推進委員会では、会場がコロナ感染リスクの軽減が期待され、感染予測のグラフから、清里で11月実施に向けて準備した。

11月7日、紅葉に包まれ晴天に恵まれた、山梨県北杜市清里フォトアートミュージアムで「おやこ写真教室」を開催した。参加者は8組16名の親子に、教育推進委員会担当山口規子理事と委員5名が、講師・スタッフとして、また、清里フォトアートミュージアムの学芸員・綱 恭行氏をはじめ館の皆様による協力と、富士フィルムイメージングシステムズ(株)から木内格志氏と加藤玲子氏の2名が応援に駆けつけ、午前10時より開始した。

会議室の机には、写真教室で使用する富士フィルムミラーレス一眼X-S10が一人1台ずつ置かれ、講師の坂井田富三委員からカメラの使い方の説明を受けた。講義では写真の撮り方を教わり、参加者親子は早速カメラを手にして興味津々の様子だった。

講義の後は、秋真っ盛りの外に出て撮影実習。スタッフは教育推進委員が担当して、カメラの使い方や撮影、表現の仕方などの相談に対応した。

今回参加の親子は、子どもが7歳から10歳の小学生とその親で、デジタルミラーレスカメラの使い方の会得が早く、子どもたちは、自由に撮影を楽しんでいた。一方、親からは各委員に写真の撮り方について質問が多く寄せられ、この機会に写真を習得したいとい



晴天に恵まれ、紅葉の屋外で撮影

う熱心さが印象に残る撮影実習であった。

野外で撮影の後は、親子で代わるがわる撮影するスタジオ体験。親が子どもにスタジオで撮影してもらう、なかなかできない経験ということもあり、親子で楽しいポーズや、ひと時の思い出を写真に収めることができた。

スタジオ撮影の順番を待つ間に館内で、プロ写真家による家族写真の撮影も行われた。「おやこ写真教室」では、親子で写真を楽しむことと同時に、写真で家族の絆を深め、思い出を写真という形で残すことの大切さも目的の一つとしている。撮影した写真はプリントして、帰りに持ち帰ってもらった。

スタジオ撮影・家族写真の撮影を終えた参加者は、教室に戻り、綱氏から館に所蔵されている写真の写真表現について説明を受けた。

今回、カメラ機材を協力していただいた富士フィル



講師は、坂井田委員が担当



初めて触るデジタルミラーレスカメラに興味津々



スタジオで撮影した写真のデータは、持ち帰りできる

ムイメージングシステムズ（株）の木内氏から、フォトブックにして思い出を形にする方法やカレンダー、ハーフプリントなど様々な写真の形の説明があった。また、加藤氏からは、レンズ交換できるカメラで撮影できることや、色々な写真を撮る楽しさを、モニターに作品を映写して伝えた。

その後教室では、写真を選ぶ作業。たくさん撮影したカットから、カメラのモニターで気に入った一枚を選ぶ作業だが、子どもたちは難なくカメラを操作して写真を選んでいった。選んだ写真は、教室の大型モニターに映写して発表会を行った。

今回、エプソン販売（株）からプリンター EW-M873T を2台お借りして、参加者が選んだ写真を2Lサイズにプリントした。プリント作業中、子どもたちは、プリンターから写真が出てくる様子に興味津々で、自分の写真がプリンターの排出口から出てくるのを、みんなで取り囲んで顔を近づけ見ていた。

プリントした写真は、館のロビーで一同に並べて、写真鑑賞会を行った。写真は鑑賞会の後、ショーレックスに入れて、大切に持ち帰った。

今回の「おやこ写真教室」は、都内からの参加者が半数、開催地の山梨県近郊からの参加者が半数であった。会場を提供していただいた清里フォトアートミュージアムからは、館内で親子が写真を楽しむ姿に、賑わいのある写真教室で、ぜひ継続してほしいとの要望があった。

「おやこ写真教室」は、使用するカメラ機材や写真プリントに賛助会員の協力をいただいで実施している。

プロ写真家である、委員がスタッフとして実行するのは、写真が持つ役割を、親子という身近なところから裾野広く知ってほしいと願うところでもある。



プリンターから排出される色鮮やかなプリントに釘付け

協力：清里フォトアートミュージアム、富士フイルムイメージングシステムズ（株）、エプソン販売（株）、コメット（株）

※「おやこ写真教室」の様子は、動画でも記録して、日本写真家協会公式 YouTube チャンネルで公開しています。

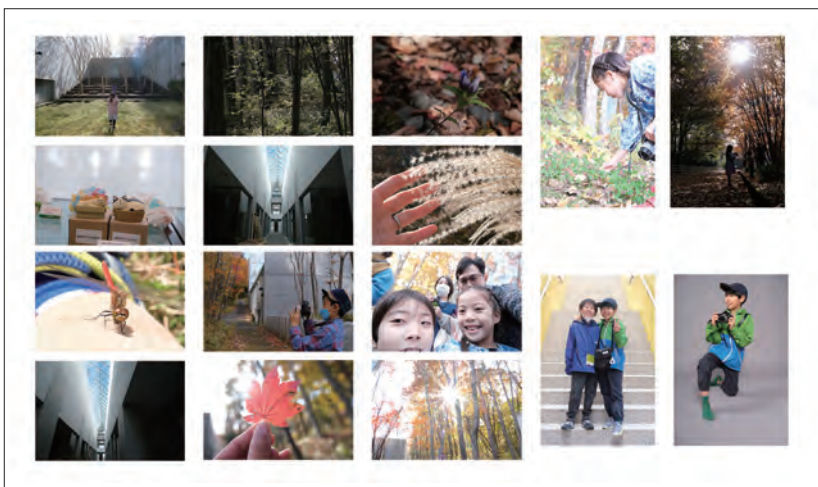
YouTube「おやこ写真教室」

https://www.jps.gr.jp/oyako_photoevent2_video/

（記／教育推進委員・安藤 豊、
撮影／安藤豊、美咲奈々）



スタッフも交え、参加者全員の記念写真



参加者が撮った作品の数々



Message Board



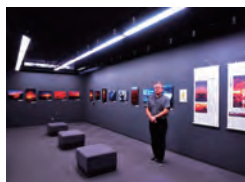
◆宇苗 満 (2006 年入会)

新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が解除された2021年10月、北海道に住むは全てと思われるほどのJPS会員が、私の作品展『カムイの島』(富士フィルムフォトサロン札幌)に応援・声援のため駆け付けてくれました。特に若手JPS会員の参川修穂くんには終日お世話になりました。この紙面をお借りして、皆さまにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

連日(来館者全員がマスクをして)満員御礼。追加の芳名帳(北海道神宮の御朱印帳)を買いに(初穂料を納めに)走り、そして作品集(大和朝廷正史『日本書紀』の阿倍臣比羅夫を紹介)も完売しました。

今回の作品群40枚は、来年度建て替える奥尻町役場の新庁舎に常設展示(エントランスホールから町長室まで)となるので、観光で来島された方は永年どなたでも観覧することができます。

(北海道奥尻島在住)



◆参川修穂 (2018 年入会)

札幌で催された、宇苗満さんの作品展『カムイの島』に伺った。JPS仲間じゃないかと、いろいろなお話ししていた。楽しく学びのある時間だった。時勢にかかわらず写真展の少ない地方ながら、JPS会員ならではのつながりを感じることができた。

作品展のキャプションは同名作品集からの抜粋。文章も豊富な作品集を踏まえて見直すと、(言うまでもなく)写真の見方／見え方が変わる。趣の反芻である。宇苗さんは、『カムイの島』は計算や作為によって撮影されたものではない」と言う。偶然、運……? 違う。モチーフが、ただそこに在るということ——写真家の必要条件——を偶発性から昇華させているのだろう。そんなことを感じさせる作品展だった。(北海道札幌市在住)



◆蓮野日出男 (1977 年入会)

家の近くを散歩していると、こんな場所にお地藏様が祀られていることに驚くことがあります。子供の頃、大阪では毎年8月24日が地藏盆で町内を廻り子供

え物をもった記憶が、ふとよみがえってきました。それ以来お地藏様を調べていくうちに東京にも沢山のお地藏様がありました。子育て地藏尊、延命地藏尊、縛り地藏尊、塩地藏尊…等。ご利益や話話の多いお地藏様が存在します。

お参りする人も多く、民間信仰としてこれからもお地藏の文化を絶やすことなく、いつまでもみんなを見守ってほしいものです。(東京都品川区在住)



◆諸河 久 (1982 年入会)

2022年1月にイカロス出版から『モノクロームの私鉄電気機関車』を上梓した。本書は2016年に創刊された季刊雑誌「電気機関車EX」の連載「探訪私鉄電機」10巻分を纏めた書籍で、私が写真とキャプションを担当し、本職の鉄道マンで西武鉄道OBの西尾恵介氏が本文を執筆された共著書となった。

戦前に諸先輩が撮影された銀塩作品からデジタル一眼で捉えた近作まで、様々なコンディションの私鉄電気機関車を掲載した。いずれも精緻な階調で印刷再現できるように、モノクロームのデジタルデータ作成にはかなりの技量と労力を費やした。その結果、編集スタッフと印刷所が連載開始以来の経験値も生かして、満足のいく印刷物に仕上げてくれた。

私鉄電気機関車の記録写真集として、コアな同好者の座右の書になることを確信している。(東京都中央区在住)



◆今井しのぶ (2020 年入会)

『ステキに魅せる写真ワザ』

著者 今井しのぶ

料理・ハンドメイド作品・花などを素敵にスタイリングして撮影をする初心者向けの本書です。光を読む、光を作る、イメージの作り方、スタイリングの基本的な考え方なども、撮影だけではなく、スマートフォンを用いたレタッチ(アプリはLightroom)で仕上げます。おうち時間が増えて、いろんな撮影にチャ



レンジをしたい! 販売を目的とした訴求力のある写真を撮りたい! SNSにてカメラを楽しみたい方の為の一冊です。著者の専門は子ども・ファミリー撮影、コロナ禍の休業中にテーブルフォトをスタート。SNSで作品を発表し、フォトポイントを伝えたところ反響があり、書籍でお手伝いできるのではと思い、出版を致しました。(神奈川県川崎市在住)

◆福田豊文 (2006 年入会)

『見るだけで癒される
愛らしすぎる犬図鑑』

毎回イヌの撮影時はワクワクする。今回はどんなシーンが撮れるだろう、と期待に胸を膨らませながら撮影に臨んでいる。そして今までに見たことのないシーンが撮れると身も心も大満足。

この繰り返しを日々継続してきた結果、今回この愛らしいコンパクトな犬図鑑が誕生した。決して豪華な図鑑ではないが、私にとっては1点1点が全て思い出深い愛着のある写真ばかりだ。成犬のみでなく、親子や子犬の愛くるしいカットもふんだんに詰まっている。コロナ禍の中、犬を飼う人が増えたという。

今後もますます人と犬の絆は深まるばかりだろう。素敵なパートナーとして、運命の出会いを求めている人にとって、この本が少しでもお役に立てればと願うばかりだ。(東京都豊島区在住)



◆越 信行 (2009 年入会)

月刊誌『旅行読覧』にて「駅舎のある風景」を連載しています。

2022年は、日本で鉄道が開業してからちょうど150年の節目を迎えます。その間たくさんの鉄道が敷かれ、駅も開設されてきましたが、昨今は鉄道や駅の廃止、無人化が進んでいます。

「駅は人生の交差点。町の顔であり、人々の特別な思いが宿る場所」というフレーズを心に描き、ライフワークとして駅を撮影してきています。連載では、そうした駅にまつわる生い立ちや物語、周辺の町の風土や歴史や、社会基盤でもある鉄道の重要性が見直されることを願いつつ、写真とともに綴っています。

このほどその連



載に新たな駅を加えた62駅のエピソードが『駅舎のある風景〜人ときが描く鉄道物語〜』という本になりました。

(栃木県小山市在住)

◆池口英司 (2016 年入会)

交通新聞社から『鉄道趣味人の世界』という単行本を上梓しました。ご多聞に漏れず企画内容が検討段階で二転三転し、当初は学生と鉄道趣味の関わり方を研究するはずが、最後は「終活」まで言及することに。この世代の話であれば、私がその適役なのだから。トホホ。

執筆に際しては、本会の伏見理事にもご登場頂き、「今、アグネス・ラムさんの写真が再評価されていますよね。だから…」など、貴重なアドバイスを頂きました。

やはり、日ごろの自分の活動とは異なる軌道で仕事をされている方の言葉というのは新鮮で、大いに刺激になります。アグネス・ラムさんの写真集、探してみようかな。



◆三村博史 (2004 年入会)

今回発刊となった『関西・幕末維新の史跡 50 選』は、幕末維新ミュージアム「霊山歴史館」のアドバイザーである木村幸比古氏との共著となります。

これまでも木村氏の書籍で撮影を担当してきましたが、今回は池田屋や壬生寺といったお馴染みの史跡だけでなく、近畿一円に残る隠れた史跡も多く紹介しています。大和で決起した天誅組や、滋賀の赤報隊、また各地で起こったさまざまな事件の関係施設など、あまり知られることもなく埋もれてしまった痕跡も探して回りました。なかには整備もされず人知れず荒れ果てた所もありましたが、幕末フリークとしてはますますこの時代に興味が深まる撮影でした。



◆荒川好夫 (1981 年入会)

普段は鉄道沿線での車庫を主とした取材活動である。駅の内部での記録を纏めたのが2020年末に刊行された『国鉄上野駅・24時間記』に続き、昨年7月『国鉄東京駅・大動脈の昭和史、変わりゆく駅の記録』を上梓しました。

思えば私が東京駅丸の内北口にあった国鉄本社ビル4階角部屋から変わりゆく赤レンガ前広場の工事中の姿を週に

何度か見ていた。その赤レンガ建物もJR化後の2012年10月1日に昔の形態駅舎復元工事の完成となった。勿論駅構内でも多くの施設も更新され、今日では国鉄時代の面影を探すことも難しくなっている。生活感たっぷりの東京「北の玄関」上野駅と比較すると、やはり「東京駅」は日本一の「表玄関」ターミナル駅である。



(東京都杉並区在住)

◆吉村和敏 (2014 年入会)

『STONE 庵治石と生きる匠たち』

世界に誇る銘石「庵治石」は、香川県高松市の北東部、讃岐の霊峰ともいわれている五剣山の山麓から産出されています。牟礼町・庵治町で暮らす石工たちは、受け継がれてきた伝統技術、長年の経験から身につけた独自の加工技術を駆使して、墓石や灯籠、彫刻などの作品を生み出し続けているのです。かねてから日本の石文化に興味を抱いていた私は、庵治石にテーマを絞り、2019年から取材を開始しました。



24人の石工たちに焦点を当て、一人一人から伝わってくる「凄味」を、スタジオポートレートと工場で働くスナップ写真によって表現してみました。石工たちの瞳の奥には、これまでの歩み、今の心の内、制作中の作品への想い、そして今後の夢と希望が溢れんばかりに詰まっています。

◆伏見行介 (1997 年入会)

デジタル時代の物撮りの現場から

私は、JPSでは少数派の広告系撮影プロダクションの代表をしています。色々撮られる広告写真の世界で、商品撮影「物撮り」の世界に変革が起きています。

物撮りの世界は、ここ20年で完全にデジタルになり、良い面も悪い面もありますが、良い面としては市場が世界に広がった事です。

昨年11月末から、正月明けまで撮影していた仕事は、某海外有名ブランド製品です。ヨーロッパのクライアント、代理店もヨーロッパ系代理店香港支社、ADは香港のフリー、フォトグラファは弊社という混成チームです。媒体はアジア向け雑誌とWebです。それを可能にするのは、高速デジタル回線とSNSのコミュニケーションツールの発達で

すが、何より重要なのは、フォトグラファの世界へ向かう心と、確かな撮影テクニックです。

極端に言えば、スマホでは撮れない写真を撮れば、世界は広がります。

(東京都新宿区在住)

◆ハービー・山口 (1986 年入会)

2022年1月に2冊を出版致しました。

1冊目は写真集『TOKYO EYES』。マスクを着けている人々のポートレート集です。ある日マスクを着けている人々の瞳が、何かを訴えているような輝きを放ち、とても素敵だと感動しました。他の顔のパーツに惑わされることなく、その人の純粋な心が瞳の中に表れているということでしょうか。この出版社は海外のフォトフェスに数多く出展するので、海外からの反応が楽しみです。



2冊目はエッセイ集『人を幸せにする写真』です。CAPAに連載しているエッセイを選抜して一冊にまとめました。写真発表だけでは伝えきれない、元氣になった出来事を文章にしました。自分の原点を見直すことが出来るので撮影に弾みがつきます。お手に取ってご覧頂けたら幸いです。

・写真集『TOKYO EYES』 発行：スーパーラボ 2022年1月6日 1,000部限定

・エッセイ集『人を幸せにする写真〜幸せになれるかもしれないと思ったあの日のこと』 発行：トゥーヴァージンズ 2022年1月30日

(東京都目黒区在住)

◆小平尚典 (1980 年入会)

アップル創業者であるスティーブ・ジョブズ氏の貴重な若き1980年代頃の写真を、米国スタンフォード大学の特別セレクト・ライブラリーへ寄贈した。

これらの写真は、世界のテクノロジー分野で最先端をゆくスタンフォードで永久に管理され、学術・研究など非商用の利用では無償で使用が可能である。原板の多くはフィルムで、デジタル調整ののち昨年9月1日から全世界に向けて公開された。



今号『会報』の表紙写真とともに、下記HPもお目通しいただきたい。
<https://searchworks.stanford.edu/view/13868695>

(東京都渋谷区在住)



素敵な日常 ————— 浅岡 恵

FUJIFILM X-T2 XF18-55mm F2.8-4.0 R LM OIS



Backstreet Breakdance ——— ジェyson ハレコ
FUJIFILM X-T4 XF50mm F1.0



Style —— 中村 翔

FUJIFILM X-S10 XF56mm F1.2 R

絶対、描きたい風景がある。



フォトグラファー | 山形 豪 GO YAMAGATA

XF10-24mmF4 R OIS WR

高性能な手ブレ補正機能を搭載し

あらゆるフィールドでの

手持ち撮影を可能にする。

Xシリーズ史上最高性能の

圧倒的なパフォーマンスと、

フィルムメーカーならではの色再現性。

フラッグシップモデルが、

またひとつ進化した。

X-T4

世界最速*15コマ/秒の高速連写と
最短約0.02秒のAFにより決定的なシーンを逃さない。
小型軽量ボディに高性能な手ブレ補正機能を搭載！
快適に高画質な動画撮影も可能。



※APS-C以上のサイズのセンサーを搭載したミラーレスデジタルカメラとして。
メカニカルシャッター設定時。2020年2月26日時点。当社調べ。

●5軸・最大6.5段のボディ内手ブレ補正機能を搭載 ●フィルムシミュレーションに「ETERNA プリチバイパス」を追加
●4K/60P 10bit 動画撮影機能、電子式手ブレ補正機能を搭載 ●新開発の大容量バッテリーにより約500枚の連続撮影が可能

<http://fujifilm-x.com/ja/>

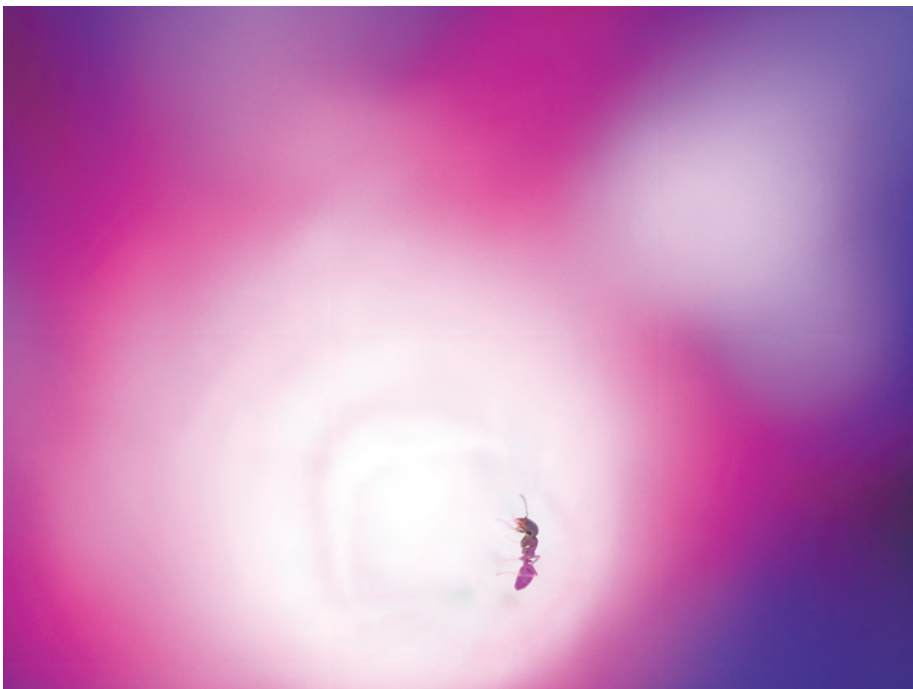


Photo Yoshizumi Shiho